

文献から見る日本のハロウィーン受容史—昭和戦後（1980年前半まで）—

佐々木 隆

プロローグ

筆者はこれまで日本のハロウィーン受容について、概観として「日本ハロウィーン受容小史」（2020）を発表したが、2020年以前から継続的に受容史を取り上げてきた。「日本のハロウィーン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィーン」（2019）、「文献から見る日本のハロウィーン受容史—大正・昭和戦前」（2020）を発表したが、本稿はそれに続くものである。

1 英語教育・異文化体験の「ハロウィーン」

日本の戦後のハロウィーン受容を考える時、英語教育の導入やその推進を無視することはできないだろう。言語学習と文化は切り離せない。これは言語が文化と密接な関係にあるからだ。戦後、英語教育が中学校以降の教育に導入されたことにより、異文化体験も同時に開始されていくことになる。紀平健一「戦後英語教育史 私論—ひとつの総括—」（2000）には次のような紹介がある。

明朗で若々しいアメリカ兵の闊歩する姿を目の当りにして、国民の対米感情は急速に好転し、戦時中の「鬼畜米英」からは信じられない「英会話ブーム」が起った。『日米会話手帳』（昭和20年）が360万部を売りつくしたという事実も、「カムカム英語」（NHK「英語会話」昭和21年—26年）が、国民的番組の様相を呈したのも、その象徴であつた。都市部にはGIが溢れ、早くも、昭和20年のクリスマスにはダンスホールも多数出現するなど、世相は一変した。この「英会話ブーム」の根底には、アメリカ兵に見る「自由と豊かさ」への憧れがあつた。小島信夫の『アメリカン・スクール』（昭和29年）は、アメリカン・スクール訪問をめぐる当時の中学校英語教師たちの屈折した心情を描くものであつた。⁽¹⁾

1964年には東京オリンピックの開催、これに伴いその前年に国際化の一環として1963年には第1回実用英語検定試験が実施された。

1961年に社会教育審議会が文部大臣に対し、社会教育拡充方策の一環として、青少年および成人に学習目標を与え意欲を高める意味で技能検定が必要である旨を答申。

これを受けて、「実用英語の普及・向上」を目的として1963年4月に財団法人日本英語検定協会が設立され、同年8月、文部省後援のもとに第1回実用英語技能検定（1級・2級・3級）を全国47都市で実施、約38,000名が受験。

第1回検定志願者数37,663名、合格者数15,259名。⁽²⁾

英語教育は明治時代には学校教育として定着したが、この時にはまだ「ハロウィーン」が取り上げられることはなかったが、いわゆる戦後の英語教育では、英語だけでなく、英

語文化圏の習慣や行事なども同時に紹介されるようになった。学校教育では年中行事を意識することはよくあることだ。また、明治・大正時代には海外の習慣や様子などは書物以外には実際に留学などをした体験談などから日本人として感じたハロウィーン体験談も貴重なものだ。戦後になると日本も国際社会に復帰すると個人の海外旅行もできるようになり、海外視察、留学なども行われるようになった。今でこそ海外留学は珍しいものではないが、昭和という時代はまだまだ一般庶民が誰もが海外に行く時代というところまでは浸透していない。ここではそのいくつかを紹介しておきたい。

(1) 中澤健「Halloween Party ハロウィーン・パーティー」(1949)

『時事英語研究』(第4巻第11号、1949年11月)には高等米會話の題材として中澤健「Halloween Party ハロウィーン・パーティー」が掲載され、Bob と Jim の会話としてパーティーの場面になっている。説明文には以下のようにになっている。

パーティーの中央に置かれた盥には水が盛っており、それに林檎が浮かんで居る。この林檎を前歯で持上げるのがこのパーティーの主たる餘興だ。これをするとき、悪戯者が傍らに居ると、サブンと頭を水へ押込まれることがある。

この盥を圍んでジムや近隣の女學生等が立つて居る。そこへ Bob が後ればせにやつて来る。これが寸劇であったら、ジムと女學生との間に、「ボブが来たら、遅刻した罰として、頭を水の中へ押込んでやれ」などという会話があるべきだが、これは、會話練習のために書くのであるから、話すのは Jim と Bob だけにする。但しこれを寸劇としてやつて見度いという様な篤學の團體があつたら、筆者は喜んで、出演が出来る様に、脚本を書いてあげる。⁽³⁾

これはハロウィーンの時に行われる林檎加え (apple bobbing) のことだろう。挿絵も掲載されている。

(2) 坂西志保「ハロウィーンのまつり」(1950)

坂西志保「ハロウィーンのまつり」は坂西志保『アメリカの生活』(社会科文庫、三省堂出版、1950年1月)に所収されているものだ。小見出し等は文章に示されているため、これを採用して今回このように項目として表記した。「第9章 年中行事」なかで、前後の行事は9月の「労働祭」「ハロウィーンのまつり」「コロンブスの日」「感謝祭」と続いている。順番としては本来は「労働祭」(9月第1日曜日)、「コロンブスの日」(10月12日)、「ハロウィーンのまつり」(10月31日)、「感謝祭」(11月第4木曜日)となるべきところだ。坂西志保(1896-1976)は1922年にアメリカに留学し、3年後にホイートン大学を卒業し、ミシガン大学大学院で美学を学び、1929年に博士号を取得した経歴を持つ。ホリンス大学哲学部助教歴任後、アメリカ議会図書館日本課長に就任し、日本文化に関する書籍・資

料の収集に当たったが、日本海軍のスパイの側面もあったようだ。坂西もまたおそらく自身の経験からこのハロウィーンについて記しているのだ。4つのパラグラフで構成されている。

第1パラグラフ

10月の最後の日にはハロウィーン祭といって、地獄に住んでいるたくさんの魔女がほうきに乗って、この夜下界に降りて来るのです。暗くなると、空に怪しい火がみえて、シュツ、シュツと魔女のとんでいる音が聞こえますが、まっ黒な着物を着ているので、姿は見えません。これは子供のお祭りといってもよく、学校やクラブでパーティをします。畑に行き、トウモロコシの枯葉を集めて室をかざります。大きなカボチャをくりぬいて、目や鼻をつけ、中にろうそくを立てます。そして、電気をみな消してしまうので、氣味が悪いのです。うなるような声が聞こえて来ます。冷たい手がにゅうと出て、顔をなでます。女の子はキャッと行って逃げ出します。⁽⁴⁾

「子供のお祭り」のとらえ方をしていること、学校やクラブでパーティをすることが紹介されている。ジャック・オ・ランタン表現はないが、カボチャをくりぬき、その中に蝋燭をたてることも紹介されている。

第2パラグラフ

町の人はじっと息をこらして、家の中にとじこもっています。魔女がせっけんで窓ガラスにいたずら書をして行きます。ごみ箱を2, 3町も先へかついで行ったり、門の柱をぬいてしまったりします。このようないたずらをするのは、実は近所の子供なのですが、ハロウィーンの夜は、たいがいいたずらをするのは、実は近所の子供なのですが、ハロウィーンの夜は、たいがいのいたずらはしかられません。しかし、物をこわしたり、人の迷惑になるようなことをしてはなりません。⁽⁵⁾

ここではハロウィーンの時にする子供のいたずらが紹介されている。普段なら叱られるいたずらも、ある程度は容認されていることも書かれている。

第3パラグラフ

子供たちは、白い布をかぶり、目だけ光らせ、町を練り歩いたり、墓地にかくれていて、通る人をおどかします。大きな財布を道におとしておいて、だれかそれを拾おうとすると、結わえてあるなわを引っばったりします。⁽⁶⁾

ここではいわゆる仮装をし、町をねり歩くとある。いたずらもより具体的に示されている。注目しておきたいことは“trick or treat”の“treat”、すなわちお菓子をもらうといった表現は全くみられないことだ。

第4パラグラフ

学校ではダンスがあつて、みんなお面をかぶり、海賊になったり、魔女になったりして來ます。いちばん奇抜な服装をして來た者に賞品が出ます。(7)

第1パラグラフでも言及されていたが、学校でのパーティの様子がさらに具体的に描写されている。

第5パラグラフ

カボチャのパイとリンゴからとったサイダーをいたゞいて散会します。(8)

最後は1行の文章である。いわゆるハロウィーンゲームではなく、単にパーティのおやつ・お菓子が紹介されているに過ぎない。

全体としてみると、第3パラグラフでの解説でも言及したが、“trick or treat”の描写がはっきりしていない。いたゞきだけが強調されており、家々を巡り歩くという表現もなく、町を練り歩くとなっている点は気になるところだ。

(3) Robert W. Russell “A Quiet Halloween—American Life through Conversation—” (1955)

『英語研究』(第44巻第11号、1955年11月)には Robert W. Russell “A Quiet Halloween—American Life through Conversation—” が収録されている。季節的にあつた英会話の練習として日英語が併記されている。冒頭の部分とハロウィーンの説明のところを紹介しておきたい。

(Evening of October 31st, about 7:30 PM. Mr. Johnson is in the living room, reading the newspaper, Mrs. Johnson is sewing. Bill walks into the living room.)

Mr.: So, this your night to howl.

Bill: Well, not exactly. It's the Century for me. Special Halloween dance Remember?

Mr.: Oh, yes, I'm glad you're riding with someone else. Who are ou taking?

Mary *(as she walks into living room)*: Who do you think? The usual....

Maxine.

Bill: Who asked you?

Mrs.: What show did you girls decide to see?

Mary: We'll probably go to that new Marlon Brando picture. I think he's cute.

Bill: That's funny way to pick a picture.

(There's a clatter of feet on the front porch, and the doorbell rings,)

Masked voices: BOOOHH!

Bill (*in mock terror*): Ooooh, help, Hey, dad! HELP.

Voices (*one somewhat worried*): It's me, Bill. Jimmie.

(*other voices*): Trick or treat!

Bill: Mom, hwo are we fixed?

Mrs. (*coming to door*): Oooh, they look like real ghosts.

Mary (*behind Mrs.*): Who's the skeleton?

Mr. (*as he peers over shoulders*): That's a beauty of a jack o'lantern.

Small voice: I made it.

静かなハロウィンの夜

(10月31日夜7時半頃、ジョンソン氏は居間に坐って新聞を読み、夫人は縫物をしている。ビルが部屋へ入って来る。)

J氏: いよいよ、今夜は君達のお楽しみの晩だね。

ビル: そうでもないさ。僕はセンチュリーへ行くだけさ。ハロウィンの特別舞踏会にね。前に話したでしょうが?

J氏: そうだったね。兎に角誰かと車に乗っていくそうだからよかつたよ。一体誰を同伴するの?

メリー: (居間へ入って来て) 誰だと思つて? 例によつて例の通り、マキシムよ。

ビル: 誰も君に聞いてないじゃないか。

J夫人: 貴方方は何の映画にするの?

メリー: 多分マロン・ブランドの新しい映画よ。彼は一寸いけるわね。

ビル: 全く呆れた映画の選び方さ。

(玄関に幾つものカタカタカカと言う足音が聞こえてドアベルが鳴る)

ビル: おお、連中早々と初めやがつたな。

(ドアにゆき、開ける)

面(マスク)の中の声: ブウ、ウ、ウウ!

ビル: (わざとこわごわと) オオ...助けてくれ。お父さん、お助け...

声(一人が心配気に): ビル、僕だよ。ジミーだよ。

(他の大勢の声): ご馳走をくれるかい? それとも一暴れしようか?

ビル: お母さん何かあるの?

J夫人: (ドアの所へやつてきて) オオ...本物のお化けのようね。

メリー: (夫人の所で) 骸骨は誰なの?

J氏: (肩ごしに) 南瓜の提灯はよく出来ているね。

小声: 僕が作っただよ。⁽⁹⁾

最後のところではハロウィーンの様子について次のような会話がある。

Mr.: Well, it has been a rather quiet Halloween after all.

Pete: Yes, thank God. We used to pull some crazy stunts when we were young, but nothing as mean or dangerous as some of those pulled around town last year.

Mrs.: Halloween is a wonderful night for small children. I hope we can keep it that way.

J氏：どうやらハロインの夜も平穩無事だったね。

ビート：全く良かったよ。我々が若い頃はよく暴れたものだが、でも去年のハロインの晩程にひどくはなかつたね。たちが悪くて実に危険だった。

J夫人：でもハロインは子供達がそりあ楽しみにしていますわね。つづけてやりたいものですわ。⁽¹⁰⁾

ハロインがかつて荒れたていたことが紹介されている。Notesにはハロウィーンの説明がある。

Halloween[hàelouí:n]諸聖徒の霊を祭る11月1日の万聖節(Allhallows)又はAll Saints' Dayと呼ばれる)の前夜祭。この前夜祭は若い人達が、外出して人をからかつたり、時には乱暴ないたずらを働いたり、或はお化けの仮装をしたりして楽しむ夜である。⁽¹¹⁾

子供がお化けの仮装をして家々を巡り、玄関先でtrick or treatと言い、お菓子をもらうことが盛り込まれている。カボチャのジャック・オ・ランタンも登場する。一般にはまだあまり知られていないハロウィーンを会話の教材として紹介しているものであるが、かつてのハロウィーンが荒れていたことを考えるとタイトルの“A Quiet Halloween”の意味が見えてくる。

(4) W.L.Clark “Lesson Fourteen HALLOWEEN” (1957)

W.L.Clark“Lesson Fourteen HALLOWEEN”は『SPOKEN AMERICAN ENGLISH (Advanced Course)』(研究社出版、1957年9月)に収録されている。邦名は『アメリカ口語教本』である。

会話の教本であるが、4つのセクションから構成されている。

Section I Presentation for Perproduction

Section II Application Dialogue

Section III Pattern Usage Drill

Section IV Japanese-English Drill

“Section I Presentation for Perproduction”では4つのパラグラフがあり、第1パラグ

ラフはアメリカでのハロウィーンの様子。第 2 パラグラフは第 1 パラグラフと同様であるが、ハロウィーンの子供達の様子が紹介されている。第 3 パラグラフはハロウィーンの起源、第 4 パラグラフは日本のお盆との比較の内容になっている。

第 1 パラグラフは以下のような英文である。

1. There is a holiday in the United States devoted to the world of myth and superstition. October 31, or Halloween, is the special night of witches, ghosts, and devils. It is the night when American children and adults too dress themselves in outlandish costumes. For a while, they return to the strange and mysterious world of superstition. When night falls, the children go out into the neighborhood to show their costumes from door to door. They carry big paper bags which they fill with candy and other goodies given them by the neighbors. It is quite amusing to watch these young pirates, Indians, ghosts, and what not, gather on your front porch to beg for sweets. ^(1 2)

ここではアメリカでのハロウィーンの様子が説明されている。子供も大人も海賊、インディアン、幽霊などに仮装して、紙袋を持った子供達は近所を巡り、お菓子を貰う。

第 2 パラグラフは第 1 パラグラフと同様であるが、ハロウィーンの子供達の様子がさらに具体的に説明されている。

2. *We want candy. We want gum.*

We want anything. Yum! Yum! YUM!

This is the song the children on the porches of the neighbors. The wise neighbor will give them an offering, otherwise the children are liable to take their revenge on him by writing on his windows with pieces of soap or playing other pranks. Some the older children prefer to confine themselves strictly to mischief, while they leave begging for candy to the youngsters. One of their favorite tricks is to ring someone's doorbell and then run away before they can be caught. Sometimes they do real damage, but, for the most part, their mischief is innocent. ^(1 3)

“trick or treat”でお菓子がもらえなかった時のいたずらの例として石鹸で窓にいたずら書きすることが紹介されている。また、ドアベルを押して、逃が去るという、いわゆる「ピンポンダッシュ」もいたずらとして紹介されている。

(5) 「〈10月の行事〉ハロウィーン」(1957)

「〈10月の行事〉ハロウィーン」(1957) (『中学英語時代』第 1 巻第 63 号、日本英語教育協会、1957 年 10 月) のおもな内容は以下の通りである。

悪魔の夜
かぼちゃのちょうちん
ゲームのいろいろ

全体で見開き 2 頁の紹介である。冒頭は以下の通りである。

英米の行事で、日本でもわりあいによく行われている行事が 2 つあります。1 つはクリスマス (Christmas [krɪsməs クリスマス] で、言うまでもなくキリストの誕生を祝うおまつりですが、もうひとつは四月馬鹿 (April Fool [éɪprɪl fu:l エイプリル フール]) です。この日は、みなさんもお存じのおうにおとなも子どもも大びらにうそをつける日ですが、さらに英米のこともには大びらにいたずらのできる日—いや夜があります。10 月 31 日のハロウィーン (Hallowe'en [hælouí:n]) がその宵です。

むかし、迷信ぶかかった人々は、この夜、鬼 (goblin [gɒblɪn ゴブリン]) や魔女 (witch [wɪtʃ ウィッチ]) などの悪霊が地上をさまよって歩いて、気の弱い者にいたずらをすると思信じたのです。そして、これらの悪霊どもをめでどへおいもどすために、彼らをおどかさすことを考えついたのです。⁽¹⁴⁾

この後は子供たちが工夫して作るかぼちゃのことや仮装のことが紹介されている。

こうした仮装したこともたちは、にわとりやいぬやねこなどをまねた奇声をあげたり、金だらいをたたいたりしながら、夜の町のつじつじをねり歩くのです。そのおもな目的は家々からお菓子をもらうことで、お菓子をくれないような家があると、さっそくいたずらをはじめます。はめ板や窓ガラスにチョークでらく書きをしたり、看板をこわしたりします。そこで、どこの家でも、子どもたちにやるキャンディを用意しておきます。

また、日本の子どもたちのやる「きもだめし」のようなスリルをたのしんだりします。大きなかがり火 (bonfire [bɒnfɪə ボンファイア]) をもやして、そのまわりにみんなが車座になり、かい談に花をさかせるのです。⁽¹⁵⁾

最後にハロウィーンゲームが紹介されている。

ドーナッツを天井からぶらさげて、手をつけずに食べる競争とか、しっぽのないロボの書いてある絵に目かくしをしたまま、しっぽをつけるあそびとか、リンゴを水に浮かべおいて、手を使わずに、口でかわえ出すあそびなどをたのしみます。とくにリンゴをくわえだすあそびはこの日になくてはならぬゲームとされています。

また、この日は学校では、仮装コンクールをもよおして、もっともよくできた者に賞品を出したりします。⁽¹⁶⁾

これがアメリカやヨーロッパやイギリスの年中行事のひとつとして紹介されている。宗教のことよりも子供を中心とした行事の内容が取り上げられている。『中学英語時代』という学習雑誌に掲載されていることもその一因であろう。

(6) 山沢かよ子「10月の行事—ハロウィーン」(1958)

山沢かよ子「10月の行事—ハロウィーン」(『中学1年英語コース』(第2巻第6号、学習研究社、1958年10月)は小見出しもなく、見開き2頁でハロウィーンを紹介している。シカゴの中学校とオクラホマシティの小学校のハロウィーンパーティの写真も掲載されている。

冒頭は次の様に始まる。

毎年、10月にはいるとアメリカの中学生たちは学校の Halloween party の計画を、じつにたのしげにはじめます。というのは Halloween のおこりにちなんだ劇の準備や、おばけコンクールの用意をはじめからです。

10月31日の Halloween のお祭は、もともとはイギリスの土着民ケルト人の大晦日だったので、す。この晩には、死んだ人々の霊がけだものにのりうつって、悪霊になって地上をさまよっていると信じられていました。悪霊を追いはらうために人人は丘の上でたきびをたいたり、さまざまな儀式やおまじないをしました。子どもたちは大きな砂糖大根で作ったチョウチンをさげて道を歩きました。こうした、いろいろな原始的な迷信がひとつの遊戯になって、Halloween のお祭になったのです。

Halloween が近づくと町の dime store (10セント店) や drug store では、悪魔の面や黒ネコをかいた orange 色のクレープ・ペーパー (ちぢみ紙) の帽子や、おばけチョウチンを売り出します。黒と orange 色の Halloween candy の大売出しもはじまります。

Halloween Night は子どもたちが一年に、ただ一度自由に夜遊びをゆるされる晩です。そうしておっぴらにどんないたずらをしてよい、じつにたのしいお祭りです。⁽¹⁷⁾

このあとゲームについての言及がある。占い、ここでは apple bobbing ではないが、リンゴを使った占いが紹介されている。

リンゴの皮を途中でちぎれないように一本のテープのようにむき、それを頭の上で三回まわして肩ごしに投げ床の上におちたリンゴの皮から、自分の未来の恋人のかしら文字をうらなったりします。⁽¹⁸⁾

次に中学生に人気のあるゲームが紹介される。

メリケン粉の中に、指輪 ring、銅貨 coin、指ぬき thimble などをかくして、ナイフ knife できりわけてうらないをするゲーム game です。ring をあてた人は将来、結婚すること

をいみし、**thimble** は **old maid** (オールド・ミス)、**coin** はお金もちになることを意味します。(19)

そしてハロウィーンが最も盛り上げる夜についても次のように紹介されている。

夜になると、いよいよ **Halloween** も最高潮になります。子どもたちはそれぞれ趣向をこらした変そうをして、いたずらの巡礼に出かけます。頭から白いシートをかぶって、眼のところだけあなをあけているものもあれば、**drug store** で買ったがいこつの服(黒地に白がいこつが染めぬいてある服)を着ているものもいます。おばけや、魔女になった子どもたちは、軒なみに戸をたたいてお客さんだと思って出てくる人をくらがりの中から急にとび出しおどかしたりします。おとなはいつもならどなりつけるところですが、この晩だけは、いたずらを最少限度にとどめてもらうために、このかわいらしい脅迫者たちに用意しておいた **Halloween** の **candy** を一袋ふるまうのです。**Halloween** の翌朝は道路にとめてある自動車のボディ **body** や窓には石けんの落書きがしてあったり、靴屋 **shoe shop** の看板とパン屋 **bakery** の看板とがかけかえられていたりします。(20)

雑誌が中学 1 年生用のため、英語を楽しく学べるように、英語圏文化のうち、中学生が楽しめる行事として紹介されたのだろう。

(7) 庄野潤三「万聖節前夜」(1959)

庄野潤三「万聖節前夜」は『ガンビア滞在記』(中央公論社、1959年3月)に所収されているエッセイである。

庄野潤三(1921・2009)は『プールサイド小景』(1955)で芥川賞受賞を受賞した小説家である。庄野は1959年に、ケニオン大学へ1年間の留学のため、アメリカ・オハイオ州ガンビア村に滞在した。その経験をまとめたのが『ガンビア滞在記』である。庄野の夫妻でガンビアに滞在した。ガンビアで体験したハロウィーンから2か所を引用しておきたい。

10月31日のハロウィーン(万聖節前夜)が近づくと、急に子供の楽書が現れた。マウント・ヴァーノンでは、大通りの商店の窓という窓に蠟を溶かしたようなものでなぐり書きをしてある。ハロウィーンには子供は楽書してもいいことになっているのだそうだ。

自動車の窓にも楽書してある。しかし、みんなのままにしてある。消したところでまた書かれるから、ハロウィーンの日まで放って置こうという気らしい。

意味のある文句とか絵というのは殆どなくて、ただ滅茶滅茶に飾り窓いっぱい線をはきまわっている。きつと夜、それらの店がしまってから、マウント・ヴァーノンの子供らが大通りを駆けて行きながらこの楽書をやったに違いない。どの楽書も勢いがいいのはそのせいだろうと思う。

ガンビアには楽書は少なかったが、印象的なものが一つあった。ヘイズの食料品店の窓に「ウィルソンへ行け」と書いてあり、ウィルソン食料品店の窓には「ヘイズへ行け」と書いてあった。公平な楽書である。どちらもハローイーンの日が過ぎるまで消さずに置いてあった。⁽²¹⁾

.....

木曜日がハローイーンで、学校は次の週の月曜日まで休みとなった。私は来年のハローイーンは見られないので、惜しい機会を失ったわけである。ところが学校のパーティーは見られなかったが、ハローイーンの子供は私たちのバラックへやって来た。

その前の晩、夕食を済ませて私がシャワー室で金盥の湯につかっている時、入口のドアをノックする音が聞こえた。私は出ていけないので、妻が出てみると、大勢の子供いろんな動物の面のついた布を頭からすっぽりかぶって立っている。熊もいるし、虎もいるし、ラックーンらしいものもいる。面がなくて、布だけかぶっている子供もいる。

みんな手に茶色の紙袋を持っている。食料品店で買った物を入れるあの紙袋だ。この紙袋は何のために持っているかという、貰ったお菓子をを入れるためだ。私たちはジューンからハローイーンの晩の習慣を聞いていた。子供たちが家を一軒一軒廻って歩き、どの家でも来た子供にお菓子をやるのである。

「上等のお菓子は要らない。一番安いキャンデーをやればいい」

ジューンはそう言った。それを聞いたのは2週間ほど前のことだったので、私たちは子供たちに上げるキャンデーを買っておくのをすっかり忘れてしまった。

幸いその前の晩、ケニオンの学生のジニイの学生とトムの二人が持って来てくれたチョコレート箱があった。金盥のお湯につかっている私のところに、妻が聞きに来た。

「何人いる？」

「さあ、よく分からないけど、15、6人くらい知ら？」

「そんなに来てるのか」

チョコレートの箱を持って玄関へ行く妻に私はシャワー室から叫んだ。

「一人一個でいいぞ！」

みんな自分の紙袋を出して、それにチョコレートを入れてもらった。一人一人、「サンキュー」と言った。一人だけまだやっと歩けるくらいの子供がいて、その子も一人前に紙袋を持って順番を待っているのだった。みんな貰い終わると、道に待っているワゴン型の車に乗って、次の家へ出かけて行った。大人が一人いて、車を運転して行ったそうである。⁽²²⁾

.....

ハローイーンにはカボチャの中身をくり抜いて、眼や口を明け、中に蠟燭を立てて窓のところに飾るのだそうだ。エリオットさんの家ではこしらえてあった。子供のいる家でないとやらないのだろう。ジューンのところではまだシリーンが赤ん坊なので、南瓜のお化けはこしらえていない。⁽²³⁾

ハロウィーンにはつきもののいたずらについては、ここでは窓に蠟燭で楽書（現在ではふ

つう「落書」と表記する) ことが紹介され、trick or treat については言及されていない。また仮装の描写は興味深いものがある。必ずしもお化けにこだわっていないようだ。要は非日常の姿になることが重要なようだ。また、ここではジャック・オー・ランタンという表現はないものの、カボチャのランタンが子供のためのもの、あるいは子供が作るものというような、お菓子、カボチャのランタンは子供向けのものと、ハロウィーンが子供のための行事であることが暗に描写されている。

(8) 加藤秀俊『アメリカの小さな町から』(1965)

加藤秀俊『アメリカの小さな町から』(1965)には「年中行事」として「ハロウィーン」が紹介されている。加藤は1953年～1954年にハーバード大学、シカゴ大学に留学していた経歴がある。紹介されているのはスピリングフィールドの町でのハロウィーンでのことで、加藤が留学していた頃のことか、あるいはそれ以降のことのことだろう。時期的には1953年～1964年の間に加藤が体験したアメリカのハロウィーンということになる。

スピリングフィールドの町でも、ハロウィーンの行事はなかなかさかんである。どんなことをするのかというと、まず第一に、夕暮れとともに、子どもたちが仮装をこらしてほうぼうの家に出没する。スーパーマンの格好をしたものもいるし、オニの面をつけたものもいる。要するに小悪魔なのである。いずれも、3、4人、徒党をなして個別訪問だ。玄関のベルを鳴らす。ドアをあけてやると、この小悪魔たち、口々にかわいらしい声で、“trick or treat!”(ごちそうしないといたずらするぞ)といいながら、手にもった紙袋をさし出す。

この訪問をうけたら、ごちそうしてやらなければならない。チョコレートであれ、アメ玉であれ、ビスケットであれ、なんでもいい。さし出された紙袋に入れてやるのである。そうすると、小悪魔たちは退散してゆく。「ごちそう」のための、小さな菓子類をスーパーマーケットは2週間ほどまえから売出す。一個1セントか2セントの砂糖菓子のたぐいである。

なにしろ、ハロウィーンの晩には、つぎからつぎへの、小悪魔たちがやってくるから、ふつうの10セントのチョコレートなんかごちそうしていたらフトコロが痛い。じっさい、わたしの家も、小悪魔の襲来にそなえて、ずいぶん砂糖菓子を買ってこんでおいたのだが、夜の9時には、もうなくなった。それ以後の訪問者には、ふつうのクラッカー一枚で勘弁してもらわなければならなかったのである。

ヒマな老人たちは、このかわいい小悪魔たちの訪問をたのしみにして、小さな手づくりの菓子をたくさん用意しておく。わたしの娘も徒党に参加して、紙袋いっぱい砂糖菓子をつめてきたけれど、キャンデーに目鼻をつけたりして手づくりの菓子もまじっていた。

ハロウィーンの晩にはあちこちの家で、カボチャのオバケが陳列される。赤いカボチャをくりぬいて、目鼻をナイフで切りこみ、なかにロウソクを立てる。カボチャの内がわ

の、オレンジ色の皮に映えて、目鼻が赤く輝く。これを門の上に立てたり、玄関の脇に置いたりする。このカボチャのバケモノがいわば小悪魔を招待するシンボルにもなる。こうして、ハロウィンの夜のスピリングフィールドは子どもたちの足音と、叫び声とカボチャのバケモノでにぎやかだ。なんとなく、みんなが子どもぼいファンタジーに酔ってしまうのである。

ところで、このカボチャであるが、ドルイッドについてわたしがしらべてみたかぎり、それはふたつの意味をとどめている。第1に、カボチャは、古代アイルランドの収穫祭と関係している。カボチャじたいがドルイッドで使われたかどうかは知らないが、この日クルミだのリンゴだのを神さまに供えたのは事実らしい。第2に、この目鼻のついたバケモノは、魔女の小道具のひとつたる頭ガイコツの代用品である。「白雪姫」その他でご存じのように、北ヨーロッパの魔女は、黒ネコ、頭ガイコツ、ホウキという道具立てであられる。頭ガイコツを持たない魔女というのは、鉄棒のないオニみたいなものだ。ハロウィンは、かかる魔女の出没する日であるから、カボチャのバケモノをもってガイコツの代用とするのである。⁽²⁴⁾

また、加藤が日本人として感じたハロウィンの興味深い内容であるので紹介しておきたい。

よく考え、かつしらべてみると、このドルイッドなど、おそろしく日本の土着信仰に似ている。ハロウィンの日にタマシイが近親者のところに戻ってくるという考え方は、日本のお盆にそっくりだし、だいいち、ドルイッドでは、お盆の迎え火とおなじように、火をたいて、タマシイが道をまちがえずに帰ってこれるようにしておいたという。さらにいうなら、このドルイッドという名前じたい、ギリシャ語でカシの木を意味するコトバから出ているようで、歴然とした樹木信仰なのであった。

ハロウィンの日をスプリングフィールドですごし、小悪魔たちにキャンデーと渡しながら、わたしはこの行事にはたいへん親近感をおぼえる。日本にある小正月という行事—たとえば秋田県のナマハゲ行事—などと、なんとそれは酷似していることであろうか。キリスト教に、わたしはなかなかなじめない。ユニタリアン派の考え方などは尊敬もするし、一種の共通感覚をさえもつことができるが、それにしても、キリスト教それじたいとじぶんをつなげて考えることはできない。しかし、ハロウィンなどという「異教」の名残りがでてくると、突如として、わかった、という気持がする。正直いって、うれしくなってしまうのである。⁽²⁵⁾

加藤の娘もハロウィンを体験しているとあるので、その娘の感想などがあれば、さらに興味深いものとなっただろう。

(9) 桂ユキ子「ハロウィン」(1967)

桂ユキ子「ハロウィン」は『小二教育技術』(第20巻第9号、小学館、1967年11月)

に収録されている。執筆者の桂ユキ子については次のような紹介がある。

大正 2 年東京生まる。もと二科会会員で、現在は、日本美術家連盟委員を務める。東京国際美術展で優秀賞、現代日本美術展で最優賞を受賞している。1956 年より 5 年間、ヨーロッパ、アメリカを旅行、その間アフリカにもよる。そのときのことをまとめた旅行記で、毎日出版文化賞を受賞。⁽²⁶⁾

1964 年の東京オリンピックを契機に海外渡航の自由化が OECD から勧告を受けているが、一般人が海外旅行することなどは当時は夢のような話だ。芸能人がハワイに行くのはまさにその象徴とも言えた時代だ。海外旅行は成功者や裕福な家庭にしかできない特別な旅行であった。

さて、エッセイの冒頭は以下のように始まる。

私はニューヨークで 3 年ばかりアパート住まいをしたことがある。それはある年の 10 月 31 日の晩であったが、入口のベルがなった。

今ごろだれだろうとのぞき窓からドアの外を見ると、小さな頭が 3 つ。はて、子どもに知りあいはないがと思いながら私は戸をあげてびっくりした。10 歳ぐらいの男の子ふたりに女の子のひとり。ひとは白いシーツを全身に巻き、ひとは玩具のお面をかぶったお姫さまの扮装で、私を見るなりてんでに声をはりあげて、「トリック、オワ、トリート。トリック、オワ、トリート」と言いながら、手にぶら下げている紙の袋をふりまわした。げげんな顔の私にむかって、彼らは説明するように「ハロウィン、ハロウィンの日よ」という。⁽²⁷⁾

桂はその後、子供達を部屋に招き入れ、子供達には特に用意はしていなかったため、日本から送られたきた塩せんべいをあげ、子供達からの質問に答え、日本にはハロウィンはないが、それに似たお盆がという風習があることを説明した。

次の年のハロウィンでの桂の体験はまた違った趣であった。注目すべき内容がある。

次の年のハロウィンの夜、私は街で 5 歳ぐらいの男の子が、自動菓子販売機の前に立って、大きな紙袋の口を機械におしつけているのを見かけ。この夜ばかりはお金を入れなくても、もしかしたら機械の中からお菓子がざくざくと出てくるかもしれない、と思っているらしいその子。この愛らしい夢を祝福あれ、と私は思った。

ところが次の年のハロウィンの晩に子どもの訪問をうけた私は驚ろいてすぐドアをしめてしまった。それは、やはり 10 歳前後の見知らぬ三人組だったが、用意してあったクッキーには目もくれず、「ぼくたちはどこの家でもお金だけもらうよ。お菓子なんてくだらないものはぼくたちおことわりだよ」と可愛げのない表情でつつ立ちながら各人が右手をつき出したからである。一年一度の無礼講、という風習は近ごろその風流味を失い、放火その他の悪質なものがでるようになって、禁止令がでたとかうことである。⁽²⁸⁾

お菓子からお金へというところは得てして犯罪に結びつきやすい状態になりかねない。田舎ではなく、ニューヨークでのハロウィーンでの出来事であることは注目しておくべきだろう。

(10) 小山田義文「Halloween と Walpurgis Night」(1970)

『高校クラスルーム』(11月号、旺文社、1970年11月)には「教育のトピックス」として小山田義文「Halloween と Walpurgis Night」が掲載されている。その冒頭は次の通りである。

10月31日は Halloween である。これは万聖節 (Allhallows or All Saints' Day, 11月1日)の宵祭りである。万聖節は死者の霊をとむらうキリスト教のお祭りで、その意味で日本のお盆に当たるようなものだが、別に国の祭日でもないので、学校や会社が休みになることもない。⁽²⁹⁾

この後でハロウィーンがケルト文化の行事であることが紹介され、そのあとはドイツの伝承として知られる Walpurgisnacht (ヴァルブルギスナハト) に言及している。

魔女の大集会といえ、中部ヨーロッパの民間伝承にある Walpurgis night 「バルブルギスの夜祭り」(ドイツ語 Walpurgisnacht の訳)は有名だ。これは May Day つまり5月1日の前夜に当たっていて、この夜魔女たちがほうきの柄にのって山頂の集会所に集まり大宴会を開いて大いに浮かれさわぎ、魔王に忠誠を誓い、新参者の入門式を行ない、これからの新しい任務をさずかるといわれている。魔法は山羊が他の動物の姿としてあらわれ、そして本当の姿にかえってその祭宴を主宰するのである。メレジュコフスキーの『神神の復活』というレオナルド・ダ・ヴィンチを主人公にしたイタリア・ルネッサンスを描いた小説に、この Walpurgis night の模様が活写されているが、この witches'sabbath (悪魔の宴会)を文学的に有名にしたものは、何よりもゲーテの『ファウスト』(第1部)である。

Halloween と All Saints' Day が harvest time、つまり秋の終わりと冬の始まりという季節の変わり目をあらわすとすれば、その半年前の Walpurgis night と May Day は北国の長い冬と短い春の後の夏のおとずれ、つまり growing season、農耕開始の時を示している。万物生成繁茂のとき、魔女や悪霊の力もまた活発で、だから作物や家畜、そして人命を守るために、火をたいて悪魔を払う必要があったのである。⁽³⁰⁾

このあとハロウィーンを説明した英文があり、次のような解説がある。

これは Halloween の習慣を解説した一文からの抜粋であるが、horseshoe つまり蹄鉄

が魔よけになる話は My English Readers (A), Book 2, Lesson 12 “How These Things Came About” を参照させるとおもしろい。

こんにちでは、Halloween はすっかり子供のお祭りになってしまっている。彼らは Beggars' Night と呼んで仮装をし、ときには仮面をつけて街に出て、近所の家を訪ねまわる。ベルを鳴らして、玄関ではねまわり家の者が出てくると、

“Trick or treat! Trick or treat!”

という。つまり “Give us a treat or we will play a trick on you.” という意味なのである。そこで人びとは子供たちに candy, popcorn, cookie, apple といったものを与える。

子供たちの trick つまりいたずらで最もふつうなのは、家や車の窓ガラスに石けんで絵をや文字をかくことである。⁽³¹⁾

このあとは Jack-o'-lantern の説明がある。また、占いなどについて紹介されている。My English Readers (A), Book 2 とは小山田が旺文社から出版している高校英語教科書である。

(11) 水池日出夫「ハロウィンパーティー」(1986)

ここでは 1980 年代初頭までとしたが、例外的にこの視察のものを取り入れた。発行は 1986 年 3 月であるが、視察はおそらく 1985 年の 10 月下旬ものと思われる。

『海外の教育』(第 85 号 [第 12 巻第 2 号]、1986 年 3 月) には八幡浜市江戸岡小学校の水池日出夫がアメリカの小学校の視察報告として文章を寄せた「ハロウィンパーティー」が掲載されている。

アメリカの小学校 6 校を視察した。Halloween Party が近いと、教室、廊下、階段などあらゆるところで、おばけに関する作品がわれわれを迎えてくれた。教室の入口には、紙で作ったくもや、くもの巣。教室の中にも、ほうきにまたがった魔女などの共同制作。この地方は、みわたすかぎり畑、畑、畑、そこでとれたおとながやと抱えられるくらい大きなかぼちゃの中味をくり抜き、目・鼻・口を付け、中にろうそくを立てたおばけ。階段の手すりには綿を敷きつめ、いろいろなおばけが、想像豊かにところ狭しとならべられていた。図画工作に関する教科書はないが、地域の行事をみごとに生かした学校全体、地域全体が取り組んだすばらしい数々の作品に感動した。

西ドイツで、壁紙の見本を小さく切って、画用紙として使っていたり、廃品を利用したややおとなしいと感じた作品に比べ、アメリカのグランドアイランド市でみた作品は、カラフルで、しかも装飾に満ちて華やかであった。市から無償で配られる各色の色画用紙。幅 1 メートル以上もある大きさ、その数にも驚かされた。⁽³²⁾

水池はグランドアイランド市の小学校 6 校に視察に行ったのだろう。グランドアイランド市はネブラスカ州南中部ホール郡の都市である。西ドイツのことにも触れていることから、

おそらく西ドイツにも視察の経験があるのだろう。学校教育と地域の特性を生かした年中行事に注目すると興味深い内容である。発行年月からすると、実際の視察年は直近で1985年となろう。この頃の日本では1983年に原宿のキディランドで子供向けハロウィーンパレードがようやく開催されたばかりで、一般にはまだまだ馴染みのない状態であった。

2 その他の事典類の「ハロウィーン」

筆者は「事典・辞典の『ハロウィーン』—『広辞苑』と『大辞林』—」（『むらおさ』第33号、2021年1月）を発表しているため、ここでは特に「イギリス文化事典」「アメリカ文化事典」「年中行事事典」といった事典からハロウィーンの掲載状況を時系列で紹介しておきたい。ただし翻訳による事典類は除外した。

(1) 宗教の専門書：松村武雄『儀礼及び神話の研究』（1948）

戦後間もない頃に専門書に「ハロウィーン」に関する記述が見られる。松村武雄『儀礼及び神話の研究』（培風館、1948年4月）の「ドルイド教的祭儀の基督教化」の中に見られる。

「萬聖節」（Hallow-mass All Hallows）が天上諸聖徒の霊を祀る基督教の一祝祭であり、その意味に於て、「萬聖節の前夜」（Hallow-e'en）がさまざまな催物に満つことは、人のよく知るところである。而して今日の英國一殊にウェールズは、他の基督教團と同じやうに、「萬聖節」の祭禮に饗宴を開き相敬語して天上諸聖徒の霊を祀る。ウェールズの邊境に於て「萬聖節の前夜」に子供たちが家々を訪れ廻りながら歌ふところは、⁽⁸³⁾

このあと“Wissel wassel, bread and possel”から始まる歌が紹介されている。

ウェールズの民衆は、「萬聖節の前夜」を呼ぶに All Hallows eve 若しくは Hallow-e'en の如き基督教的名稱を以てしないで、「冬の第一夜」（Nos Calan Gauaf）若しくは「冬の前夜」（Nos Cyn Gauaf）の稱呼を以てする。是等の稱呼は頗る示唆的である。なぜなら「冬の第一夜」は、それ自らに於て充足完了した稱呼でなくて、他の夜と何等かの聯繫を有することを語るからである。實際それはウェールズの民衆が古くから「テール・ノス・イスプリドノス」（Teir Nos Ysprydno）と呼んだものの一部を形成してゐる。「テール・ノス・イスプリドノス」は「精霊のための三夜」の義である。ウェールズ人は、これ等三夜を目してあらゆる精霊が自由に可章夫する時と信じた。而してその中の一夜が即ち「冬の第一夜」に他ならぬ。

「冬の第一夜」は、幽霊が出歩き、妖精が出動し、あらゆる鬼魅類が自由に活躍する夜であり、また或る積の呪法・呪詞によつてこれ等の驚異を呼び出して未来を語り得る夜であると信ぜられた。かくて古くからこの日にはさまざまなドルイディズムの宗教的實修が

行はれた。

基督教にとっては、異教徒が観じた精霊は晝く邪霊であつた。さうしたものに呼びかける異教徒的祭儀は、基督教徒にとっては餘りに幼陰であり weird であり過ぎた。彼等は自分たちが目にして邪霊となすものをして民衆宗教的感情を支配せしめるに忍びなかつた。

かくて彼等は、基督教化運動が屢々採用するところの原則的手段の一つを採り上げた。謂ふところの原則的手段の一つとは、異教的祭儀が向けられるところの主體を異教的なものから基督教的なものへ變化させること——一つの代用過程である。さうした代用過程によつて基督教化運動は、「精霊のため」のドルイディズムの一祭儀に基督教的な修正を加へて、之を「天上諸聖徒のため」の祭儀に變貌せしめたのであつた。⁽³⁴⁾

『儀礼及び神話の研究』だけにハロウィーンの行事というよりも異教徒的祭儀がキリスト教に取り込まれて行く内容を取り上げている。

(2) 年中行事・イギリス文化・アメリカ文化事典類

年中行事に関する事典、イギリス文化、アメリカ文化に関する事典類を時系列で取り上げておきたい。

西角井正慶編『年中行事辞典』東京堂出版、1958年5月

Hallowe'en, All hallowes Eve, Hallow Eve 10月31日。万聖節の前夜祭。キリスト教諸国で、輪快なことをして、ふざける日とされている。万聖節は諸聖徒を一括して祭る祝日として定められたものであるが、ハロウィーンはその前夜祭として、キリスト教以前の迷信や行事を一まとめにした行事と見られるもので、その起源については諸説があるが、古代ヨーロッパ北部に居住したドルイド族の祭がもとであるという説もある。ドルイド族には、寒い冬を迎える前に、一晩大騒ぎをしたり、幽霊の話をして、夏に別れをおしむ風習があつたといわれる。また、ローマ人が果物の女神ボナモに、豊かな収穫を祈ったことに関連するという。中世紀のヨーロッパには今日のハロウィーンとよく似た先祖祭があつたという。ハロウィーンには祖先の精霊が地上にさまよい出ると信じられており、これを地下に追帰するための諸行事があつた。大声を立て、路上で会う者を亡霊と見なして、見さかいなくなぐり付けたことなどがそれで、これから悪口雑言をわめき立てる夜となり、また塀や戸口に白十字のしるしなどをかきつける風をも生じた。イングランドでは、子供たちは白い敷布などを頭からかぶり、手に空罐などを持って叩いて歩き、会う人ごとに1ペニーもらう。それでいたずら公認の日として、子供たちは待ちかねる。アメリカでも、ハロウィーンには子供が面をかぶって町中をわめき歩き、塀や入口などに落書を書きつけ、家々で菓子をもって廻る行事が行われる。仮装した子どもが金だらいを叩き、犬猫のなき声などの奇声をあげて、町を歩き、窓ガラスなどに落書を書きちらし、街路に空罐などを積み上げて焚火をしたり、路上の腰掛や標識でバ

リケードを築いて交通妨害を行うので、警察が総出動で片付ける所もある。あまり悪戯がひどいため、それを善導する目的もあって、仮装のコンクールを行う所もある。仮装では南瓜をくりぬいて目鼻をつけたものをはじめ、骸骨や海賊、箒にのった妖女などさまざまな工夫をこらしたものが登場する。また、この日の遊びではリンゴやドーナツをつり下げて食うパン食い競争式のゲームが最も行われる。スコットランドでは、ハロウィーンの晩に若い男女が集まって、将来の配偶者を占う遊戯的な儀式を行う風もある。

(35)

成田成寿編『英語歳時記／秋』研究社出版、1968年12月

高橋康也「Halloween、Hallowe'en [háelouí:n]

11月1日の万聖節の vigil (宵祭、前夜祭)、すなわち 10月31日。ただしラテン系国家では宗教的色彩が強いが、イギリス、アイルランド、アメリカ合衆国では、民俗的習慣が教会的行事と並行して残存している。起原は古く、古代ケルト民族のドルーイド教の収穫感謝祭の行事にローマの果実の女神 Pomona の祭りが加味されたものと思われる。古代ケルト民族は1年の終わりを 10月31日と定め、その夜を死者の祭りとした。それは死者の霊が親族を訪れる夜であり、また悪霊が横行し、子どもをさらったり、作物や家畜に害をなす夜であった (Goethe の Faust などにみられる中世の「魔女の Sabbath」のうち、10月31日の Sabbath が最も盛大であって、ほうきにまたがって各地から祭りに参加する魔女のイメージはハロウィーンにはつきものである)。当然、死者の霊を導くため、また悪霊をはらうため、焚き火が不可欠のものとなる。

また今日、仮装した子どもたちがねり歩き、窓を叩いたり、“Trick or treat” (ごちそうをださないといわずらだぞ) といって喜捨をせびったりする風習も、魔女や妖精のいたずらや祭り用の食糧を貰って歩いた農民など、中世の風習の名残である。イギリスではこの祭り用の食糧をもらって歩いた農民など、中世の風習の名残である。イギリスではこの祭りは Guy Fawkes Day (前出) に吸収された観があるが、アメリカでは Ireland 移民によって輸入されて以来、Jack-o'-lantern (カボチャの中身をくりぬいて目・鼻・口を切り抜き、なかにもろうそくをとす。これはしゃれこうべの変形であろう。「生活」の項参照)、黒ネコやそのほか気味の悪い飾りもの、仮面、どんちゃん騒ぎ、いたずらなどがこの日の名物になっている。この夜はまた来るべき冬に備え、新年の占いをするときでもあったことから、今日でも結婚、幸運などの占いが行われる。パン食い競走に似た 'bob apples' (リンゴ食い競走) もこの日のつきもの。(36)

このあとはロバート・バーンズの詩「ハロウィーン」の一節が紹介されている。

安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社出版、1982年12月

櫻庭信之「ハロウィーンの夜祭り (Hallowe' en Bonfires)

11月1日を万聖節といって諸聖人の祝日 (All Saints' Day) で、アングロ・サクソ

ン語で“hallow”とは聖徒 (saint) を意味した。その前夜祭 (10月31日) を Hallowe'en という。万聖節の前夜祭 (All Hallows Even) がつづまって Hallowe'en となったのである。この祭りは10月31日と11月1日にかけて徹夜で祈る前夜祭 (Vigil) と万聖節 (Feast of All Saints) と、11月2日の万霊節 (Feast of All Souls) と3日間にわたるキリスト教の祭りであるが、ケルト時代から伝わるものである。その大昔の時代からこの祭りは幽霊とか精霊とか死に関係があった。キリスト教以前においては、この日は俗世と来世の垣根が取り払われて、死者が墓場より蘇ると信じられていた。この前夜祭に大かがり火をたく Hallowe'en Bonfires の行事は、19世紀末まで続いていたが、今日では11月5日の Guy Fawkes' Night のたき火の習慣に残っているにすぎない。

スコットランドの野天のたき火は魔女 (witch) を退治する言いをもっていた。ヴィクトリア女王の時代には、バルモラル城 (Balmoral Castle) の前で大かがり火がたかれ、キルトをつけた氏族 (clan) がバグパイプを先頭に、シャンディ・ダン (Shandy Dann) と呼ぶ魔女の像を車で運んで焼き捨てた。ウェイルズでも丘の上ではりえに시다 (gorse) やわらを山と積んで焼き、じゃがいもやリンゴを焼いて食べ、火の周りで踊った。その時各人は白い石に印をつけて火の中に投げ、翌朝その石が砕けずであれば吉、砕けたりなくなっていれば凶と占った。⁽³⁷⁾

佐伯彰一他編『アメリカハンドブック』三省堂、1986年10月

※「ハロウィーン」の項目なし。

※「ハロウィーン」への言及あり。

加藤恭子「アメリカの年中行事」の中に次のような言及がある。

「10月31日にはもう一つ、子供たちにとっては忘れられない「ハロウィーン」がある。これもまた数々の異教徒的要素とキリスト教的要素の混合した行事である。英国の島々や北部フランスの古い住民であったケルト族たちの元日は、11月1日であったと言われている。10月31日とは彼らの大晦日で、精霊や妖精などが騒ぎ廻ると信じていたらしい。

また、サムヘインという死の神の祭りを行っていたことから、「ハロウィーン」の代表色、黒とオレンジのうち、その黒に受け継がれたと言われている。百鬼夜行のほうは、その夜の子供たちのグロテスクな扮装に残っている。一方、オレンジ色の方は、古いローマの祭、庭や果樹の女神であったポモナの祭からきたのではないかと考えられている。

このように、異教徒的要素としては、大晦日の精霊たちの甦り、死と収穫の神々の祭を土台としているのだが、一方キリスト教的要素としては、835年にすべての聖人たちを記念する「万聖節」を11月1日と決めたことであった。その前夜にあたる10月31日は、“All Hallows' Eve”と呼ばれた。この“hallow”は、「聖なる」の意味であるが、この名称から「ハロウィーン」が生まれたと言われている。

この夜、子供たちは思い思いの服装をして紙袋を下げ、近所の家々を廻り「ごちそ

うしないと、いたずらするぞ！」(Trick or treat!)と脅して、キャンディーなどを袋に入れてもらうのである。10月に入ると、「ハロウィーン」にどんな仮装をするか、子どもたちは楽し気に話し合うようになる。

この夜の他の小道具は、カボチャをくりぬいて作るジャック・オ・ランタンであるが、これも蕪を精霊除けに用いたケルト族の伝統の名残りという。また、水に浮かべたりんごを、手を使わずに口で取るアップル・ボビングも、「ハロウィーン」特有のものである。家庭やそれぞれの地区でも、子供のためのパーティーを開いたりする。⁽³⁸⁾

亀井俊介編『アメリカ文化事典』研究社出版、1999年9月

粕谷千由紀「ハロウィーン Halloween」

10月31日の夜に、仮装をして楽しむ祭り。

ハロウィーンならではの飾り付けとして、かぼちゃの中身をくり抜き、目・鼻・口に穴を開けたちょうちん(ジャック・オ・ランタン)をポーチや窓際に置く。この他、おばけや骸骨といったグロテスクな人形を庭木などにぶら下げる家もある。

当日夕食後暗くなると、子供は思い思いの仮装をし、キャンディを入れる袋を手に、近所を回る。衣装を手作りだったり買ったものだったりであるが、吸血鬼や魔女など気味の悪いものが定番になっている。幼児はウサギその他の動物に扮することが多い。子供は各家のドアをノックし、家の人が出てくると、「ごちそうしてくれないといたずらするよ」(‘Trick or treat’)という。各家庭ではキャンディを用意しておき、子供に与える。

ハロウィーンでは、子供はボビング・フォー・アップル(bobbing-for-apple)と呼ばれる、りんごをくわえるゲームをする。これは、水を入れた桶にリングをいくつか浮かべ、手を使わずに歯だけでくわえるゲームである。大人だけのパーティでは、仮装をして集まりおしゃべりすることが多い。

古代ケルト人の間で、10月31日は旧暦の大晦日に当たり、死者の霊が戻って来ると信じられていた。ちょうど秋の収穫を祝う時期でもあるので、ケルト人はこの日を祭りの日にしていた。やがてローマ人がケルト人をキリスト教に改宗させようとしたとき、この習慣をキリスト教に取り込んで利用することにし、翌日の11月1日をキリスト教の聖人を記念する「万聖節」(All Hallows)に定めた。Halloweenという言葉は、All Hallows Eve(万聖節の前夜)からきている。⁽³⁹⁾

斉藤真他監修『【新訂増補】アメリカを知る事典』平凡社、2000年1月新訂増補版第1刷

岡田泰男「ハロウィーン | Halloween: Hallowe'en」

10月31日の夜に行われる年中行事、古代ケルト人のサムハイン Samhain 祭が起源といわれる。これは死の神サムハインをたたえ、新しい年と冬を迎える祭りで、この日の夜には死者の魂が家に帰ると信じられた。キリスト教の伝播にともない、この祭りはキリスト教にとりこまれ、諸聖人の祝日である万聖節(11月1日)の前夜として位

置づけられた。hallow とはアングロ・サクソン語で<聖徒 saint>を意味し、All Hallows Even (万聖節前夜祭) がつづまって<Halloween>となった。今日ではアメリカ合衆国の子どもの祭りとして有名である。アメリカでは、この夜のため、大きなカボチャをくり抜き、目鼻口をつけた提灯 jack-o'-lantern を作り、窓際に飾っておく。学校では仮装パーティなどが開かれるが、夜になると怪物、魔女、海賊などに仮装した子どもたちが、隣近所の家々を回って<ごちそうしないと、いたずらするぞ Trick or treat!>と言いながら、チョコレートやキャンディをせびっていく。⁽⁴⁰⁾

橋口稔編『イギリス文化事典』大修館書店、2003年6月

坂本ひとみ「ハロウィーン、万聖節の前夜祭 (Hallowe'en)」

10月31日のハロウィーンは、11月1日の万聖節 (All Saints' Day) の前夜祭であり、All Hallows (=Saints) Eve がつづまって Hallowe'en となった。この日と万聖節とその翌日の万霊節 (All Souls' Day) は、天国の聖者や煉獄の霊、死者を悼む日でキリスト教の祭りであるが、ケルト時代から伝わるものである。ハロウィーンは古代ケルトの暦で一年の終りの日であるため、新しい年の運を占うためのさまざまな遊びがある。くるみを火にくべてはじけるか否かで恋の行方を占ったり、女の子たちがリンゴの皮をむいてそれを投げ、未来の夫の名前をイニシャルを読みとる占いをしたりする。また、ひもで、つるしたり水を入れた桶にかべたリンゴを手を用いずに口でくわえる遊びもある。ハロウィーンの夜6時から、仮面をつけて魔女や妖精に変装した子供たちが家々を訪ねて 'Trick or Treat!' と叫ぶ。これはお菓子やおもちゃをくれないといたずらするぞという意味であり、もらうと子供たちは 'Happy Halloween!' と叫び、大人の方も 'Happy Halloween!' と言いつ返す。こうした遊びやハロウィーンの大かがり火 (Hallowe'en Bonfires) の習慣も、今日の Guy Fawkes Day に吸収されてしまったようである。⁽⁴¹⁾

加藤迪男編『記念日・祝日の事典』東京堂出版、2006年4月

ハロウィン (Halloween)

もともとは11月1日に行われるキリスト教の祝日・万聖節の前の日を指した。アイルランドの古代ケルト暦では大晦日にあたり、死者の霊が家に戻ってくる日で、ほうきに乘った魔女が黒猫を連れてやって来て悪さをする日と言われていた。子供たいがいろいろな扮装をして戸口で「お菓子をくれなきゃ悪戯するよ」と脅すのもケルト族の言い伝えから。この日のシンボルは、カボチャのランタン、魔女、お化け。シンボルカラーはオレンジと黒。⁽⁴²⁾

新谷尚紀監修『ポプラディア情報館年中行事』ポプラ社、2009年3月

ハロウィーン 古代ヨーロッパの祭りから生まれました。今では、子どもたちが仮装してお菓子をもらう行事です。ケルト人の収穫祭がはじまりハロウィーンは、ヨーロッパではじまった、万聖節 (天国にいる聖人を記念するキリスト教の祝日で、11月1日のこと) の前夜祭で、ヨーロッパの先住民族であるケルト民族の祭りの日を1年の

終わりとして、その年の収穫を感謝し、その夜に家族のもとにもどるとされる先祖の霊を迎える祭りをおこなっていました。同時に、その夜は養成や魔女、悪霊も空を飛びまわるろ信じられ、それらを追いはらうために、魔よけ明かりをともしました。

3～4世紀ごろに、ヨーロッパにキリスト教がひろまり大きく発展します。そして、7世紀はじめごろに、ケルトのこの祭りがキリスト教の祝日である11月1日の万聖節の前夜祭と重なることから、いっしょにおこなうようになり、これが「ハロウィーン」という行事になりました。仮装とお菓子の祭りにハロウィーンが現在のようになったのは、17世紀以降のこと。ヨーロッパからの移民が、アメリカでハロウィーンをおこなうようになってからです。

10月31日の晩、子どもたちはおばけなどの仮装をして「トリック・オア・トリート」（おやつをくれなきゃいたずらするよ）といて、近所をまわってお菓子をもらいます。これは、ケルト民族が、祭りのための食糧を集めた歩いたことがもとになっているといわれます。

また、中世のヨーロッパの風習がもとになったともいわれます。それは、11月2日に、亡くなった人がいるキリスト教徒の家を訪ねてパンケーキをもらい、そのお礼にお祈りをすると、死者は、天国に行けるというものでした。ハロウィーンがちかづくとき、オレンジ色のかぼちゃをかたどったものに目、鼻、口をあけたランタン（手さげのランプ）が店先に並びます。これは、悪魔をだましたジャックという男が、罰としてあの世とこの世のあいだをさまようときにもつ明かりだというアイルランドの民話に由来するもので「ジャック・オー・ランタン」とよばれています。⁽⁴³⁾

出口保夫・小林章夫・齊藤貴子編『21世紀 イギリス文化を知る事典』東京書籍、2009年4月

小林英美「人気のないハロウィーン」

かぼちゃの灯籠ジャック・オ・ランタン（Jack o' lantern）に魔物の仮装、ハロウィーン（Halloween）はクリスマスなどと同様に、日本では宗教性の希薄な商業的イベントとして人気を博している。日本のハロウィーンはアメリカから輸入されたものだが、イギリスではどうだろうか。実はイングランドではあまりポピュラーではない。店頭に関連商品が並ぶものの勢いはあまり感じられないのだ。しかしアイルランドとスコットランドの一部では、昔から馴染みのあるお祭りとして定着している。これはどういうことか。

アメリカでのハロウィーンの本格的な始まりは、19世紀中期におけるアイルランド人のアメリカ移住にある。つまりアイルランド人がアメリカに伝えたケルト系の風習なのだ。ジャック・オ・ランタンも、もともとは蕪であったが、アメリカではかぼちゃが入手しやすい上に、大きくて抜きやすかったので普及したのだという。

ケルト系の風習と書いたがハロウィーンは、厳密にはキリスト教のお祭りとケルトの風習が融合したものである。キリスト教的には11月1日が万聖節、ないしは諸聖人の祝日（All Hallows [All Saints'] Day）で、その前夜、つまり万聖節前夜（All Hallows

[All Saints' Evening) が縮まったものである。一方、古代ケルトの暦によれば、11月1日からが新年で、その前の晩はサウインという旧年との境界である。その境界の切れ目から幽霊やお化けなどが出てきて、冬の訪れを祝して人々に悪戯をするといわれていたことが、仮装をして「もてなさない悪戯するぞ」(“Trick or Treat!”) といっ、て、お菓子などをねだって回る風習となったのであった。またそんな化け物などから身を守り、収穫を感謝するために篝火が焚かれたが、それはあとで紹介するガイ・フォークス・デイの火祭りのなかにも残っている。⁽⁴⁴⁾

日本英語文化学会編『北米文化事典』日本英語文化学会、2012年3月

「Halloween」

万聖節 (All Sant's Day) とか諸聖徒日といわれる 11 月 1 日前夜の祭り。元来宗教的行事であったが、近年は宗教色が薄れ、子どもたちが仮装して行列を行なったり、夜、大きなカボチャに目・鼻・口をくりぬいて作ったジャック・オ・ランタンという提灯を家の窓際に飾ったりする楽しい行事となっている。また、悪魔などに扮した子どもたちがそのランタンを手にとり “Trick or treat!” (ご馳走しないと悪戯するぞ!) と言いながら近所をまわり、キャンディーなどをねだる風習がある。⁽⁴⁵⁾

イギリス文化事典編集委員会編『イギリス文化事典』丸善、2014年11月

※「ハロウィーン」の項目なし、言及なし。

アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善、2018年1月

※「ハロウィーン」の項目なし。

※「ハロウィーン」への言及あり。

小森真樹「祝日・祭日」中の小見出しの「移民の国の多様性」として次のような記がある。「地域特有の行事には移民文化を起源とするものも多い。フィラデルフィアでは、毎年元旦の朝からママーズ(仮装者のこと)と呼ばれる盛大な仮装パレードが催される。17世紀半ばに北欧からクリスマス翌日を祝う祭りがもたらされ、それが19世紀頃までには、新年の祝いへと変わるとともに、ドイツ系移民に由来する新年に仮装して友人たちを訪問する習慣が混じり合って現在のママーズのもとになった。入植者たちが持ち込んだ祭りや習慣が融合して、今では宗派や民族を超えて皆が楽しむ催しとなっている。アイルランドの死の神サムハインの祭りがキリスト教と融合して成ったハロウィンと同じように、多様な文化が混じり合った祭日である。これらに見られる文化的混交こそがアメリカ的だというとらえ方もできる。⁽⁴⁶⁾

新しい事典ほどハロウィーンの記述が簡略されている傾向にあるのではないだろうか。特にイギリス文化事典では出口保夫・小林章夫・齊藤貴子編『21世紀 イギリス文化を知る事典』(2009)ではようやく小林英美「人気のないハロウィーン」として取り上げられているが、イギリスではガイ・フォークス・デーの方が盛んであることはインターネット等で

の記事でも明らかだ。日本の年中行事事典でも取り上げられるようになったこともハロウィーンがある程度定着したことのひとつの現れであろう。

3 文学と映画『ハロウィーン』紹介

ここでは文学作品（小説）がハロウィーンと深くかかわっている4作品を中心に、日本での翻訳の初出年順に取り上げた。以下に取り上げた文学作品によってハロウィーンが一般化したというわけではない。ハロウィーンを扱った文学作品、映画も含め、ふたつに分類できる。ハロウィーンという時期を生かした推理小説、もうひとつは恐怖小説、映画であればオカルト映画という流れである。

また、中子真治の文章は映画、ジョン・カーペンター監督『ハロウィーン』（1979）が公開されたときに日本の映画専門雑誌『キネマ旬報』に掲載された紹介文である。文学作品ではないが、活字として紹介されたものとして取り上げた。このオカルト映画は公開されると、日本だけでなく、世界中で怖いハロウィーンを根付かせたものとしての評価がある。

(1) エラリー・クイーン／妹尾昭夫訳『災厄の町』（1950）

エラリー・クイーン(Ellery Queen)はフレデリック・ダネイ (Frederic Dannay、1905-1982) とマンフレッド・ベニンソン・リー (Manfred Bennington Lee、1905-1971) のふたりが探偵小説を書くために用いたペンネームである。エラリー・クイーン／妹尾昭夫訳『災厄の町』（新樹社、1950年1月）は、エラリー・クイーンの *Calamity Town* (1942) の翻訳である。初訳については飯城勇三「解説 クイーンの最高傑作」(2016) で次のように紹介している。

本作の初訳は、《宝石》誌 1950年3月号に一举掲載された妹尾アキ夫訳『災厄の町』。全30章が25章に縮められていて、7割弱の抄訳になっています。⁽⁴⁷⁾

映像化については野村芳太郎監督『配達されない三通の手紙』（1979）として松竹が製作した。

三通の手紙が重要な鍵となる。ストーリーはライツヴィルのハイト家でハロウィーンの日に関による妻の殺人計画と思われる手紙が発見され、その後夫の妹が毒殺される。「7 萬聖祭」の章でハロウィーンの様子が描写されている。ここでは新しい翻訳で「7 ハロウィーン—仮面」から紹介しておきたい。

The thirty-first was mad. People on the Hill answered mysterious doorbells all day. Menacing signs in colored chalk appeared on pavements. As evening came on, costumed gnomes began to flit about town, their faces painted their arms flapping. Big sisters complained bitterly about the disappearance of various compacts and

lipsticks, and many a gnome went to bed with a ginging bottom.

It was all gay and nostalgic, and Mr. Queen strolled about the neighborhood before dinner wishing he were young again so that he, too, might enjoy the wicked pleasure of Hallowe'en. ⁽⁴⁸⁾

31日は、あまりにもばかげていた。〈ヒル〉に住む人々は一日じゅう、謎めいた呼び鈴の音に振りまわされた。道路には色つきのチョークで恐ろしげなしるしが描かれた。日が暮れると、扮装して顔を塗りたくった小鬼たちが、両腕を羽ばたかせながら、町を歩き交った。年長の娘たちはコンパクトや口紅があればこれも消えたと言って毒づき、おおぜいの小鬼たちがひりひりと痛む尻をさすりながらベッドにはいった。

何もかもが陽気で懐かしく、クイーン氏は夕食の前に近所を散歩しながら、できるものなら自分ももう一度子供に戻って、ハロウィンの悪ふざけを楽しみたいと思った。⁽⁴⁹⁾

呼び鈴のいたずら、落書き、仮装とハロウィーンの様子が紹介されている。推理小説として重要なのはこのあと書棚から落ちた分厚い本に挟んであった三通の封書である。ハロウィーンの日に見つけた3通の手紙がストーリーを展開させていくのである。

なお、この作品については Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003)では取り上げられることもなく、言及もされていない。

(2) レイ・ブラッドベリ／大久保康雄『何かが道をやってくる』(1964)

レイ・ブラッドベリ／大久保康雄『何かが道をやってくる』(東京創元社、1964年9月)は Ray Douglas Bradbury (1929-2012)の *Something Wicked This Way Comes* (1962)の翻訳である。ディズニー製作で実写映画化した SF ダークファンタジーだ。ジャック・クレイトン監督『何かが道をやってくる』(*Something Wicked This Way Comes*, 1983)として同名で実写映画化されているが、日本では劇場未公開である。

ある年の万聖節前夜、ジムとウィルの十三歳の二少年は、一夜のうちに永久に子供ではなくなった。カーニバルの騒音の中で回転木馬の進行につれて、時間は現在から未来へ過去から未来へと変わり、魔女や恐竜の徘徊する悪夢のような世界が展開する。SF界の抒情詩人が世に問う絶妙なリズム。ポオの衣鉢をつぐ一大ファンタジー。⁽⁵⁰⁾

翻訳は第39版(1985)を利用する。内容は次の通りの小見出しが設けられている。

プロローグ

- 1 到来
- 2 追跡
- 3 出発

「プロローグ」ではハロウィーンのことを言及されているので紹介しておきたい。

But you take October, now, School's been on a month and you're riding easier in the reins, jogging along. You go time to think of the garbage you'll dump on old man Prickett's porch, or the hairy-ape costume you'll wear to the YMCA the last night of the month. And if it's around October twentieth and everything smoky-smelling and the sky orange and ash gray at twilight, it seems Halloween will never come in a fail of broomsticks and a soft flap of bedsheets around corners.

But one strange wild dark long year, Halloween come early.

One year Halloween came on October 24, three hours after midnight. At that time, James Nightshade of 97 Oak Street was thirteen years, eleven months, eleven months and twenty-three days old. Next door, William Halloway was thirteen years, eleven months and twenty-four days old. Both touched toward fourteen; it almost trembled in their hands.

And that was the October week when they grew up overnight, and were never so young any more. ⁽⁵¹⁾

ところで、10月はどうだろう？学校がはじまってから1カ月にもなるので、子供たちは、たずなのとりかたに馴れて、楽々と走っているところである。そして、怒りんぼのプリアットじいさんの家の玄関先におちまくごみのことや、その月の最後の晩にYMCAへ出かけるとき着る毛深い猿の扮装のことなどを考える余裕もできてくる。そして、10月20日近くなると、あらゆるものが煤煙くさくなり、たそがれどきの空は黄ばんだ灰色におおわれるようになる。そして、あちこちの街角で箒が降ってきたり、シーツがはためいたりするうちに、万聖節前夜（10月30日）が待たれてくるのである。

しかし、ある奇妙な、調子の狂った、暗い、月日の長い年に、万聖節前夜は、いつもより早目にやってきた。

ある年、10月24日の夜の真夜中を3時間すぎたころ、万聖節前夜がおとずれたのである。

そのとき、オーク街98番地のジェイムズ・ナイトシェイドの年齢は、13年11カ月と23日であった。そして隣家のウィリアム・ハロウェイは、13年11カ月と24日であった。どちらも、あとほんのすこしで14歳に手がとどころうとしていた。

そして、彼らが一夜のうちにおとなになり、もうはや永久に子供でなくなってしまったのは、その10月の、ある週のことであった。⁽⁵²⁾

ハロウィーンの時期が鍵となっている。また、オーク街の「オーク」はケルト文化でも深く関わりを持つ樹木で、パワーを持つと言われている。

2人の少年の誕生日もハロウィーンの時期であることもさらに興味深い。翻訳では「万聖節前夜」となっている。

The storm salesman nodded as if he had known it all along.

‘Nightshade. That’s quite a name.’

‘And only fitting,’ said Will Halloway. ‘I was born one minute *before* midnight, October thirtieth. Jim was born one minute *after* midnight, which makes it October thirty-first.’

‘Halloween,’ said Jim.

By their voices, the boys had told the tale all their lives, proud of their mothers, living house next to house, running for the hospital together, bringing sons into the world seconds apart; one light, one dark. There was a history of mutual celebration behind them. Each year Will lit the candles on a single cake at one minute to midnight. Jim, at one minute after, with the last day of the month begun, below them out. ⁽⁵³⁾

嵐のセールスマンは、前からそれをしてきたかのような調子でうなずけた。

「ナイトシェイドか。ずいぶん変わった名前だな」

「でも、ジムにぴったりだよ」と、ウィル・ハロウェイがいった。「ぼくは10月30日の夜半の12時1分前に生まれ、ジムは12時1分すぎに生まれたんだ。つまり10月31日になったときに生まれたんだ」

「万聖節前夜さ」と、ジムがつけたした。」

彼の口ぶりからもわかるとおり、2人は、隣あって住んでいる彼らの母親が、いっしょに病院へかけつけ、寸分の差で、それぞれの男の子を生んだ話を、これまで何度も得々として人に語ってきかせていたのである。2人合同の誕生祝いのお話も、一つの語り草になっていた。毎年ウィルは、真夜中の一分前に、ケーキにさしたりローソクに火をともし。そしてジムは、真夜中を1分すぎて、10月の最後の日ははじまる瞬間に、そのローソクの火を吹き消すのであった。 ⁽⁵⁴⁾

簡単に内容を紹介しておくハロウィーンの日には13歳のジムとウィルの2人の少年は回転木馬の進行につれて、時間は現在から未来へ、過去から未来へと変わり、時空だけでなく、異界へも足を踏み入れることになり、魔女や恐竜のいる悪夢のような世界が展開する。まさに異界の扉が開くハロウィーンに相応しい展開だ。

【ネタバレ】『何か道をやってくる』レイ・ブラッドベリ (2014年09月30日) より一部を紹介しておこう。

「カーニバル団が来た！」とはじめは喜ぶ2人だったが、あまりに怪しすぎるので疑いをもち始める。

だが翌日から営業を始めた、この「クガー&ダーク魔術団」は昼間に見るとまったく普通のカーニバル団で、普通に賑わっている。

2人の担任のフォレー先生が「鏡の迷路」で恐ろしい目に会った以外は・・・ (この迷路、無数にある鏡に「自分の未来の姿」が映り出されるのだ。10年後や20年後の自

分、年老いてヨボヨボになった自分まで・・・)

疑いを捨てきれない2人は、またも夜中に抜け出してテントを偵察。

そこで魔術団の共同経営者の1人ミスター・クガーが、逆回転する回転木馬に乗って1年ずつ若返っていき、ついには2人と同年代の少年へと変身するショッキングな場面を目撃。⁽⁵⁵⁾

この部分を実際の作品より紹介しておこう。

Mr. Cooger's face was melting like pink wax.

His hands were becoming doll's hands.

His bones sank away beneath his clothes; his clothes then shrank down to fit his dwindling frame.

His face flickered going, and each time around he melted more.

Will saw Jim's head shift, circling.

The carousel wheeled, a great back-drifting lunar dream, the horses thrusting, the music in-gasped after, while Mr Cooger, as stimple as shadows, as simple as light, as simple as time, got younger. And younger.

And younger.

Each time he wheeled to view he sat alone with his bones, which shaped like warm candles burning away to tender years. He gazed serenely at the fiery constellations, the children-inhabited trees, which went away from him as he removed himself from them and his nose diminished and his sweet wax ears reshaped themselves to small pink roses.

Now no longer forty where he had begun his back-spiraled journey, Mr. Cooger was nineteen.

Around went the reverse parade of horse, pole, music, man become young man, young man fast rendered down to boy...

Mr Cooger was seventeen, sixteen...

Another and another time around under the sky and trees and Will whispering, Jim counting the times around, around, while the night air warmed to summer heat by friction of sun-mental brass, the passionate backturned flight of beasts, wore the wax doll down and down and washed him clean with still stranger musics until all ceased, all died away to stillness, the calliope shut up its brassworks, the ironmongery machines hissed off, and with a last faint whine like desert sands blown back up Arabian hourglasses, the carousel rocked on seaweed waters and stood still.

The figure seated in the carved white wooden sleigh chair was very small.

Mr Cooger was twelve years old.⁽⁵⁶⁾

クガー氏の顔が、桃色の蠟のように溶けはじめていた。

彼の手は人形の手のようになりかけていた。

骨が縮み、彼の来ている服も、それにつれて縮まってゆく。

顔の輝き、やあしく明滅し、ひとまり回るたびに溶け方がはげしくなった。

ウィルは、ジムの首が彼の動きにつれて回るのを見た。

奇怪な機械が、昔にさかのぼってゆく不気味な夢のように、ぐるぐる回り、獣たちがうしろ向きに突進し、音楽があえぎながらそれを追ううちに、クガー氏は刻々と、きわめて明白に、若くなっていくのであった。若く、どんどん若くなるばかりだった。

ひとまわりしてくるたびに、彼の骨は、あたためられた蠟のように軟化して、年令にふさわしい形になった。そして、炎のような星座を、あるいは子供たちの住む木を、静かに見つめながら回る彼が、彼らから遠ざかるごとに、鼻が小さくなり、やわらかな蠟の耳は小さな桃色のバラの花弁のような形に変わった。

このうしろ向きの旅をはじめたときの、40歳のクガー氏の姿は、すでになくて、いまは20歳前後の青年がいるだけだった。

馬や柱や音楽の逆行パレードが進むにつれて、中年の男が青年になり、青年はさらに、あれよあれよという間に少年へと若返ってゆくのである。

クガー氏は17歳になり、16歳になった……。

ウィルは、ただ目を見張り、ときどきつぶやき声をあげるだけだったが、ジムは機械が回る回数をかぞえていた。夜の空気は、太陽のような色の真鍮の摩擦と、狂熱的に後方へ跳びまわる獣たちの熱気で、夏のようになま温かくなり、蠟人形をつぎつぎに溶かし、洗い清めていった。そうするうちに、やがて奇怪な音楽が、はたとやんだ。あたりが、ひっそりと静まりかえった。カライアピーは吹奏楽をあめ、機械の騒音がとだえ、あたかも砂漠の砂がアラビヤの砂時計の上に吸いあげられるような、かすかなざわめきを残して、回転木馬は海草の海の上に静止した。

橋のようにえぐられた白い木の椅子にすわっている人影は、非常に小さかった。

クガー氏は12歳だった。⁽⁵⁷⁾

カーニバルを運営するためのエネルギーをハロウェイ氏は次のように考えた。

‘Because,’ said Mr Halloway. ‘You need fuel, gas, something to run a carnival on, don’t you? Women live off gossip, bones, ruptured and mended flesh, indiscretions, storms of madness, calms after the storms? If some people didn’t have something juicy to chew on, their choppers would prolapse, their souls with them. Multiply *their* pleasure at funerals, their chuckling through breakfast obituaries, add all the cat-fight marriages wehre folks spend careers ripping skin off each other and patching it back upside around, add quack doctors slicing persons to read their guts like tea leaves, then sewing them tight with fingerprinted thread, square the whole dynamite factory by ten quadrillion, and you got the black candle-power of this one carnival.

‘All the meannesses we harbour, they borrow in redoubled spades. They’re a billion time itchier for pain, sorrow, and sickness than the average man. We salt our lives with other people’s sins. Our flesh to us tastes sweet. But the carnival doesn’t care if it stinks by moonlight instead of sun, so long as it gorges on fear and pain. That’s the fuel, the vapor that spins the carousel, the raw stuffs of terror, the excruciating agony of guilt, the scream from real or imagined wounds. The carnival sucks that gas, ignites it, and chugs along its way. (58)

ハロウェイ氏がいった。「カーニバルを営むためには、燃料やガスなどが必要なのだ。女が噂話を薬にして生きているようにね。噂話は、頭痛や神経痛や関節炎や脂肪肥りやヒステリーの発作をおさえてくれる。世の中には、何か甘いものを嚙んでいないと、歯ががたがたになり、魂までぬけてしまうものもある。朝の死亡記事や、たがいに顔をひっかきあつて、はぎとった面の皮を、あべこべに張り合わせながら生涯を送る猫のような夫婦や、患者の内臓を見るために、ずたずたに切ってから、手あかのついた糸で縫い合わせるやぶ医者などの記事を読んでほくそえみ、葬式を見てはよろこぶ彼らの楽しみを増大させ、ダイナマイト工場を何兆倍かにしたものが、あのカーニバルの黒い燭光であり、磁石なのだ。

彼らは、われわれのもつあらゆる悪を、貧しさを、両刃の鋏で彫りあげる。彼らは、苦痛や悲しみや疾患に対する渴望が、ふつうの人間よりも、はるかに激しいのだ。われわれは、他人の罪よって、われわれ自身の生活に味をつける。われわれの肉体は、われわれにとっては甘い味をもっているものだ。だが、あのカーニバルのものたちは、恐怖と苦痛をたらふく食っているかぎり、たとえ太陽のかわりに月の臭気を発しても、いっこう気にとめない。回転木馬を動かす燃料は、蒸気は、なまなましい恐怖の機因であり、罪の懊悩であり、有形無形の苦痛に耐えられずに洩らすうめきや悲鳴なのだ。あのカーニバルはそのガスを吸い、発火させて、エンジンを動かしているのだ……」

(59)

再び「【初巻】『何か道をやってくる』レイ・ブラッドベリ」(2014年09月30日)に戻ろう。

しかもこの少年クガー、フォレー先生の甥っ子に成り済まして、何か企んでいる！

それを先生に警告する2人だが、もちろん信じてもらえない。

逆に魔術団の首領、全身に「生きた刺青」を施したミスター・ダークに目をつけられるハメに。

秘密を知った2人の少年を探して、町を徘徊するカーニバル団の奇形人間たち。

必死に逃げる2人、図書館の館長を務めるウィルの父が2人の話を信じて、かくまってくれる。

父もまた、カーニバル団に邪悪な何かを感じていたのだ。

クガー&ダーク魔術団は、興行先で人をさらっては、骸骨人間や小人といった奇形人間

に改造、カーニバルの見世物としてこき使うという悪魔のごとき一座。

しかも首領ミスター・ダークは「逆回転する回転木馬」で若返りを繰り返して、数百年以上前から、この邪悪な所業を続けているのだ！

図書館が襲撃され父親がダークに指の骨を折られ、少年2人が捕えられたり。

クガーが回転木馬に乗ってる時にウィルが操作盤を破壊、暴走して高速で順回転する木馬のせいでクガーが100歳以上のヨボヨボ老人に変わり果てたり。(最後はミイラ状になり、灰となって散る)

ファンタジーなのに、なかなかハードな攻防戦が展開。

クライマックス、それまでまったくの役立たずだったウィルの父が、魔術団の弱点を発見。

それは「人間の笑顔」・・・「人間の恐怖」をエネルギー源とする魔術団にとって、笑顔より恐ろしいものはないのだ。

スマイル(^▽^)を先端に刻んだ弾丸をライフルにこめ、反撃開始のウィル父。

首領ダークが修復した回転木馬で少年に若返り、警察の追及をかわそうとするが、ウィル父に慈愛に満ちたハグをされ、息絶えてしまう。(60)

最後にはこの謎の回転木馬を利用しようとも考えるが、ジムとウィル、そしてチャールズ・ハロウェイの3人は回転木馬の怪しい魅力に打ち勝ち、破壊した。

Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003)では“BRADBURY, RAY”の項目があり、次のような説明がある。

American author best known for the classic science fiction novels *Fahrenheit 451* (1953) and *The Martian Chronicles* (1950); Bradbury has also written more extensively about Halloween than any major literary Halloween than any other major literary figure. His 1972 novel *The Halloween Tree* is a fictionalized account of the history of Halloween, as the mysterious Carapace Clavicle Moundshroud leads a group of small boys through the EGYPTIAN FEAST OF THE DEAD, SAMHAIN, and the Mexican DAYS OF THE DEAD. His renowned 1962 dark fantasy *Something Wicked This Way Comes*, about a mysterious carnival which preys on the dreams of the residents of a small town, makes ingenious use of the holiday by setting its story in the week before Halloween, suggesting that on this “strange wild dark long year, Halloween came early.” (61)

また映像化については次の様に言及している。

Both *Something Wicked This Way Comes* and *The Halloween Tree* have been adapted to film (both featuring screenplays by Bradbury), the former as a theatrical feature in 1983, directed by Jack Clayton and starring Jason Robards and Jonathan

Pryce, and the latter as an animated television special in 1993. In November Book Foundation Medal for Distinguished Contribution to American Letters. ^(6 2)

『何か道をやってくる』の邦題にしる、*Something Wicked This Way Comes* の原題にしる、タイトルだけではハロウィーンとの関連性ははっきりわからないこと、劇場未公開であるため日本でのハロウィーンの知名度アップに貢献があったかは疑わしい。ただ、推理小説マニアはブラッドベリの作品であるだけに注目したことだろう。

(3) アガサ・クリスティ／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』(1971)

アガサ・クリスティ／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』(早川書房、1971年1月)はアガサ・メアリ・クラリッサ・クリスティ (Dame Agatha Mary Clarissa Christie, 1890-1976) の *Hallowe'en Party* (1969) の翻訳である。原作が発表されてから2年後に翻訳が出版されるのは、アガサ・クリスティの知名度がすでに定着していることになろう。そのタイトル通りハロウィーン・パーティの日に起きた怪事件とその背景にある過去の殺人に名探偵ポアロが挑む推理小説である。Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003) では “Appendix II Halloween in Literature and the Arts” の中で次のように述べている。

Hallowe'en Party (1969) by Agatha Christie—Featuring Christie's beloved detective Hercule Poirot, this novel uses Halloween as a key element in a classic “who-dunnit” mystery plot. During preparations for a Halloween party just outside of London, a teaged girl claims to have once witnessed a murder; later she is found drowned in the galvanized tub used in bobbing for apples, and mystery writer Aridane Oliver goes to her friend Hercule Poirot to help solve the murder. Christie describes a classic English Halloween party: Aside from the deadly bobbing for apples, there is a decorating competition (involving miniature broomsticks), fortunetelling with mirrors for the girls (while the boys, some in disguise, sneak into the reflections!), and snapdragon (which one character describes as being “really more a Christmas festivity”).

The novel also contains an apple motif. The house wherein the murder occurs is called “Apple Trees,” and Poirot always associates apples with his friend Mrs. Oliver.

(6 3)

翻訳書の裏表紙には次のような長谷部文親の紹介文が書かれている。

推理作家のオリヴァ夫人を迎えたハロウィーン・パーティで、少女が突然、殺人の現場を目撃したことがあると言いだした。パーティの後、その少女はリンゴ食い競争用のバケツに首を突っ込んで死んでいるのが発見された！童話的な世界で起こったおぞましい

殺人の謎を追い、現実から過去へと遡るポアロの推理とは？⁽⁶⁴⁾

ミセス・バトラーが 10 歳から 17 歳のまでのティーンエイジャーのために羽ハロウィーン・パーティを開催した。そこに手伝いに来ていたミセス・アリアドニ・オリヴァが去年アメリカで見たたくさんのカボチャの話をし始めた。ハロウィーンの描写をここでは取り上げておきたい。

But it was rather remarkable, seeing so many pumpkins or vegetable marrows, whatever they are. They were everywhere, in the shops, and in people's houses, with candles or nightlights inside them or strung up. Very interesting really. But it wasn't for a Hallowe'en party, it was Thanksgiving. Now I've always associated pumpkins with Hallowe'en and that's the end of October. Thanksgiving comes much later, doesn't it? Isn't it November, about the third week in November? Anyway, here, Hallowe'en is definitely the 31st of October, isn't it? First Hallowe'en and then, what comes next? All Souls' Day? That's when in Paris you go to cemeteries and put flowers on graves. Not a sad sort of feast. I mean, all the children go too, and enjoy themselves. You go to flower markets first and buy lots and lots of lovely flowers. Flowers never look so lovely as they do in Paris in the market there.'⁽⁶⁵⁾

でも、クリカボチャだかペポカボチャだか知らないけど、あんなにたくさんあるところは、ちょっと壮観って感じね。どこにでもあるのよ、店のなかにも、家のなかにも。ローソクや電灯をいれておくとか、つりさげておくとかして。ほんとにおもしろいのよ。でも、あれはハロウィーンのパーティじゃなくて、感謝祭だったわ。わたし、昔からカボチャとハロウィーンを結びつけて考えるんだけど、あれは 10 月の晦日だったわね。感謝祭はそれよりずっと後じゃなかった？ 11 月、それも 11 月の 3 週目くらいじゃなかったかしら？ どっちにしても、ハロウィーンは絶対に 10 月の 31 日だったわ。はじめにハロウィーンがきて、そのつぎはなんだっけ？ 万霊節だったかしら？ パリでは、この日、お墓参りをして、お墓に花を供えるのよ。悲しいお祭りじゃないの。だって、子供たちもみんな行って、楽しく遊ぶんだから。その前に花市場に行って、きれいな花を、そりゃたくさん買いこむの。パリの花市場でみるお花ほどきれいなお花ってないわね」⁽⁶⁶⁾

その後、パーティの飾り付けの様子が描写され、また一連のハロウィーンについて話が続く。

... there were useful teenagers, boys of sixteen and seventeen climbing up ladders or standing on chairs to put decorations, pumpkins or vegetable marrows or brightly coloured witchballs at a suitable elevation; girls from eleven to fifteen hung about in groups and giggled.

'And after All Souls' Day and cemeteries,' went on Mrs Oliver, lowering her bulk on

to the arm of a settee, 'you have All Saints' Day. I think I'm right?'

Nobody responded to this question. Mrs Drake, a handsome middle-aged woman who was giving the party, made a pronouncement.

'I'm not calling this a Hallowe'en party, although of course it is one really. I'm calling it the Eleven Plus party. It's that sort of age group. Mostly people who are leaving the Elms and going on to other schools.'⁽⁶⁷⁾

16、7の男の子たちは、梯子の上に立ったりして、クリカボチャだのペポカボチャだの、派手な色のガラスの飾り玉などの飾りを適当な高さにぶらさげたり、なかなかかたまつて、そこらをぶらいついたり、くすくす笑ったりしていた。

「そして、万霊節とお墓参りのあと」とミセス・オリヴァは長椅子の肘に腰をおろしながらつぶけた。「万聖節がくるのよ。そうだったと思うけど?」

誰もこの言葉に答えるものはいなかった。パーティの主催者である、美しい、中年のミセス・ドレイクが自分の意見を言った。

「わたくし、これをハロウィーン・パーティとは言わないことにしましたの、といっても、もちろん、ほんとはハロウィーン・パーティなんですけどね。

まあ11歳以上パーティとでも呼びましようか。そういったエイジ・グループの人たち。主として、エルムズ校をはなれて、これからほかの学校に進学しようとしている人たちのために」⁽⁶⁸⁾

そして「リンゴ食い競争」(apple bobbing)もここでは描写されている。

... 'What lovely apples!'

Someone had just brought a large bowl of apples into the room. Mrs Oliver was partial to apples.

'Lovely red ones,' she added.

'They're not really very good,' said Rowena Drake. 'But they look nice and partified. That's for bobbing for apples. They're rather soft apples, so people will be able to get their teeth into them better. Take them into the library, will you, Beatrice? Bobbing for apples always makes a mess with the water slopping over, but that doesn't matter with the library carpet, it's so old. Oh! Thank you, Joice.'

Joyce, a sturdy thirteen-year-old, seized the bowl of apples.⁽⁶⁹⁾

「まあ、なんてきれいなリンゴでしょう!」

誰かがリンゴを盛った大きなボウルを部屋に持ち込んできたところだった。ミセス・オリヴァはリンゴ大好物だった。

「きれいな、赤いリンゴだわ」とまた言った。

「ほんとはそれほど上等のものじゃないのよ」とロウィーナ・ドレイクが言った。「でも、みごとでおいしそうね。リンゴ食い競争に使うのよ。すこしやわらかめのリンゴなの。それだと歯をたてるのがやさしいんですものね。これを図書室に運んどいてくださ

らない、ピアトリス？リンゴ食い競争をすると、いつだってそこらじゅう水だらけにして、めっちゃめっちゃになるんだから。でも図書室のカーペットならかまわないのよ。古いんだから。まあ！ありがとう、ジョイス」

丈夫そうな、13歳のジョイスは、リンゴのボウルを持ちあげた。(70)

ここで描かれているハロウィーン・パーティの様子はイギリスのものだ。ハロウィーンと言えば、仮装、家々を巡り“trick or treat”と子供たちが言いながらお菓子を集めたり、時にはガラスなどに悪戯書きすることがよく取り上げられるが、家庭におけるハロウィーン・パーティのことが中心に描写されていることは興味深い。

(4) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやってきた』(1975)

レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやってきた』(晶文社、1975年1月)は、Ray Bradbury. *The Halloween Tree* (1972)の翻訳である。

ブラッドベリには『何か道をやってくる』(東京創元社、1964年9月)もあるが、ハロウィーンが書名にもなっているため、この作品には注目しておきたい。

Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003)では“Appendix II Halloween in Literature and the Arts”の中で次のように述べている。

The Halloween Tree (1972) by Ray Bradbury—Bradbury’s book is less a novel and more an extended valentine to his favorite holiday, Halloween. A group of small-town American boys is costumed and ready to trick or treat, but when their friend and leader Pipkin is mysteriously absent, they find themselves at the center of a grand adventure to track down their missing friend. Their journey begins at the town’s haunted house, which now sports a tree full of glowing pumpkins—a Halloween tree—and a whimsical owner named Carapace Clavicle Moundshroud. When Moundshroud discovers that the boys are ignorant about the history of Halloween, he takes them back into the past, where he shows them cavemen, ancient Egypt, Samhain, the Roman invasion of Britain, witches, Notre Dame, and Mexico’s Day of the Dead; all the while the boys chase Pipkin’s spirit. Finally at the end, the boys save Pipkin and gain an understanding of Halloween in the process. In book form, Bradbury’s richly-written story is accompanied by Joseph Mugnaini’s exquisite illustrations. *The Halloween Tree* was also made into an animated television special in 1993. (71)

テレビアニメ版の *The Halloween Tree* (1993)も製作されている。現在実写化の動きもあるようだが、詳細は不明である。

The Halloween Tree が『ハロウィーンがやってきた』と訳されている経緯ははっきりし

ないが、翻訳者である伊藤典夫は翻訳書『ベスト版 ハロウィーンがやってきた』（1997）の「レイ・ブラッドベリについて」の冒頭で「レイ・ブラッドベリが、はじめて子供のために書き下ろした長編ファンタジイ」⁽⁷²⁾と紹介している。伊藤はこの作品について次のように述べている。

この本も、〈児童向き〉というラベルは貼ってありますが、いままでのブラッドベリの小説とすこしも変わることはありません。物語の出発点は、アメリカ中西部の小さな町—『たんぼぼのお酒』や『何か道をやってくる』とおなじように、おそらくは作者の育ったイリノイ州の町ウォキーガンがモデルでしょう。そして時は10月、その31日、ハロウィーン、「風が木々に巣をつくり、姿のない猫の群れのように、歩道を目に見えぬ足どりで歩く」とくべつな夜—これまで数多くの短編や長編でとりあげられたあの季節、あの日、あの時間です。そしてトム・スケルトンをはじめとする9人の主人公は、みんな12、3歳—ブラッドベリがさまざまな作品でうたいあげてきた、生きるよろこびとおそれをはじめて知るあのすばらしい少年期。こう書けば、このあと作者が何を用意しているか、いちいち解説するまでもありますまい。⁽⁷³⁾

また、書名等についても次のように紹介している。

原題の *The Halloween Tree* は、クリスマス・イブにかざるツリーから作者ブラッドベリが空想したハロウィーン・ツリー。もちろん、そんな木を家庭でかざるわけではありませんが、カボチャのちょうちんのほうは、アイルランド移民によって紹介されて以来、そのほかの不気味なかざりものや、仮面、どんちゃん騒ぎ、いたずらと同様、アメリカのハロウィーンにはかかせない風物となっています。⁽⁷⁴⁾

では実際の作品より紹介しておきたい。まず本文の前にあるハロウィーンの紹介文を伊藤典夫訳『ハロウィーンがやってきた』（1975）より紹介しておきたい。

Halloween.

Sly does it. Tiptoe catspaws. Slide and creep.

But why? What for? How? When! Where did it all begin?

“You don’t know, do you?” asks Carapace Clavicie Moundshroud climbing out of the pile of leaves under the Halloween Tree. “You don’t really know!”

“Well,” answers Tom the Skeleton, “er—no.”

Was it—

In Egypt four thousand years ago, on the anniversary of the big death of the sun?

Or a million years before that, by the night fires of the cavemen?

Or in Druid Britain at the Ssssswoommmm of Samhain’s scythe?

Or among the witches, all across Europe—multitudes of hags, crones, magicians,

demons, devils?

Or high above Paris, where strange creatures froze to stone and lit the gargoyles of Notre Dame?

Or in Mexico, in cemeteries full of candlelight and tiny candy people on El Dia de los Muertos—the Day of the Dead?

Or where?

A thousand pumpkin smiles look down from the Halloween Tree, and twice-times-a-thousand fresh-cut eyes glare and wink and blink, as Moundshroud leads the eight trick-or-treaters—no, nine, But where is Pipkin?—on a leaf-tossed, kite-flying, gliding, broomstick-riding trip to learn the secret of All Hallows' Eve.

And they do.

“Well,” asks Moundshroud at journey’s end, “which was it?” A Trick or a Treat?

“Both!” all agree.

And so will you. ⁽⁷⁵⁾

ハロウィーン。

こっそり進め。しのび足で。すべるように、はうように。

だけど、なぜ？何のためにこんなことを始めたのだろうか？どういうふうに！だれが？いつ！どこで？

「わかるまい、え？」そんな問いかけとともに、カラペイス・クラヴィクル・マウンドシュラウド氏は、ハロウィーン・ツリーの下、うずたかくつもった枯れ葉のなかから現れる。「諸君はなんにも知ってはいないのだ！」

「たけど」と、骸骨男のトムは答える。「ううー知りません」

それが始まったのは—

四千年前エジプト、太陽の大いなる死をいたむ記念日だろうか？

それより百万年も前、原始人たちがたき火をかこむ夜だろうか？

サムハインの大鎌ヒュ————ンンンとうなる、ドルイド時代のイギリスだろうか？

ヨーロッパのいたるところに身をかくす魔女たち—数知らぬ妖女、鬼婆、魔術師、悪鬼、悪魔のなかだろうか？

それとも、見あげるパリの空、ふしぎな生きものたちがこおりつき、石ガーゴイルとなるノートルダム寺院だろうか？

それとも、エル・ディア・デ・ロス・ムエルトス—死者の日、ロウソクの火と小さな菓子の人びとが墓地をうずめるメキシコだろうか？

それとも、それとも？

一千のカボチャがハロウィーン・ツリーから笑みをなげ、一千の二倍のえぐられた目がにらみ、ウィンクし、まばたきするなか、マウンドシュラウドにひきいられ、8人の少年はいや、9人のはずだ、だけどピプキンはどこにいるのだろうか？—木の葉にはこぼれ、凧に乗り、風をきり、ホウキにうちまたがって旅にのぼる。ハロウィーンの秘密をさぐ

るために。

そして少年たちは秘密をさぐりあてる。

「さて」旅の終わりに、マウンドシュラドはきく、「どっちだった？<いたずら>か<もてなし>か？」

「その両方！」少年たちは答える。

きみたちも、きっとそう答えるだろう。」⁽⁷⁶⁾

書名にもなっている“the Halloween tree”「ハロウィーンの木」はテレビアニメ版の *The Halloween Tree* (1993)で視覚化されると不気味な中に怪しい魅力が潜んでいる描写になっている。活字での表現はどうだろうか。

The pumpkins on the Tree were not mere pumpkins. Each had a face was different. Every eye was stranger eye. Every nose was a weirder nose. Every mouth smiled hideously in some new way.

There must have been a thousand pumpkins on this tree, hung high and on every branch. A thousand smiles. A thousand grimaces. And twice-times-a-thousand glares and winks and blinks and leering of fresh-cut eyes.

And as the boys watched, a new thing happened.

The pumpkins began to come alive.

One by one, starting at the bottom of the Tree and the nearest pumpkins, candles took fire within the raw interiors. This one and then that and this and then still another, and on up and around, three pumpkins here, seven pumpkins still higher, a dozen clustered beyond, a hundred, five hundred, a thousand pumpkins lit their candles, which is to say brightened up their faces, showed fire in their square or round or curiously slanted eyes. Flame guttered in their toothed mouths. Sparks leaped out their ripe-out ears.

And from somewhere two voices, three or maybe four voices whispered and chanted a kind of singsong or old sea shanty of the sky and time and the earth turning over into sleep.⁽⁷⁷⁾

その<木>にぶらさがるカボチャは、ふつうのカボチャではなかった。どれにも顔がきざまれていて、どの顔もちがっているのだ。それぞれ、どこかしらちがうふしぎな目。それぞれ、どこかしらちがう不気味な鼻。それぞれ、どこかしらちがうおそろしい笑いをうかべた口。

枝のひとつひとつに高くつるされたカボチャは、この木ぜんたいで一千個はあるにちがない。1000の笑み。1000のしかめづら。そして、えぐられたばかりの目が見せる、100の2倍のにらみとウィンクとまばたきと流し目。

ながめるうちに、新しいことがおこった。

カボチャにいのちが吹きこまれはじめたのだ。

いちばん低い枝、いちばん近いカボチャからはじまって、そのなまなましい空洞のなかに立つロウソクに、ひとつひとつ火がともった。このカボチャ、そのカボチャ、またこちら、つぎはあちら、まわりへ上へ、ここでは3つ、上では7つ、そのむこうでは12と、100、500、1000のカボチャに明かりがつき、その顔がかがやかせ、四角い目やまるい目、変なふうにたれた目、つりあがった目から火をのぞかせた。歯をむきだした口から炎がこぼれ、熟した耳の穴から火花がはじけとんだ。

そして、どこからともなく2つの声、3つ、もしかしたら4つの声がひびき、ささやくように単調に、空と時と眠りにおちる大地をうたう古い船唄とも、呪文とも思える言葉をとなえた。⁽⁷⁸⁾

このファンタジーの中でドルイド教、サムハインの記述は興味深いものがある。

All the boys being safely landed on English earth, their billion autumn leaves fell off and blew away.

They stood in the midst of a vast field of wheat.

“Here, Master Nibley, I brought your scythe. Take it. Grab! Now lie low!” warned Moundshroud. “The Druid God of the Dead! Samhain! Fall!”

They fell.

For a huge scythe came skimming down out of the sky. With its great razor edge it cut the wind. With its whistling side it sliced clouds. It beheaded trees. It razored along the cheek of the hill. It made a clean shave of wheat. In the air a whole blizzard of wheat fell.

And with every whisk, every cut, every scythe, the sky was aswarm with cries and shrieks and screams.

The scythe hissed up.⁽⁷⁹⁾

少年たちが無事イギリスの大地におりると、10億の枯れ葉は体からはなれ、飛んでいった。

彼らはひろびろとした小麦畑のまん中に立った。

「ほら、ニブリーの旦那さん、大鎌を持ってきてあげたよ。手をだして。つかむんだ！ さあ、体をひくくしろ！」マウンドシュラウドが注意した。「ドルイド教の死者の神だ！ サムハインだぞ！ たおれて！」

彼らはつつぶした。

なぜなら、ちょうどそのとき、とほうもない大鎌が空からおりてきたからだ。大きなカミソリの刃が風を切った。ヒュルヒュルと鳴る金属面が雲を引きひきさいた。それは木々のこずえをはねとばした。丘の斜面をかすめた。小麦畑をきれいにそりおとした。小麦の穂がふぶきとなって散った。

鎌がひとつりされるごとに、叫びと悲鳴と鳴き声が空にみちわたった。

鎌がうなった。⁽⁸⁰⁾

.....
“And it all adds up. Four thousand years ago, one hundred years ago, this year, one place or another, but the celebrations all the same—”

“The Feast of Samhain—”

“The Time of the Dead Ones—”

“All Souls’. All Saints’.”

“The Day of the Dead.”

“El Dia De Muerte.”

“All Hallows’.”

“Halloween.”

The boys sent their frail voices up, up through the levels of time, from all the ages, naming the holidays which were the same. ⁽⁸¹⁾

「そのすべてが、ここに集まっているのだ。4000年前も、100年前も、どこであろうと、お祭りだということに変わりはない—」

「サムハインの祭り—」

「死んだ祖先をむかえる日—」

「万聖節」

「死者の日」

「エル・ディア・デ・ムエルテ」

「万聖節」

「ハロウィーン」

あらゆる国から、あらゆる時代から、少年たちはかぼそい声をあげ、かさなりあった歴史の層のひとつひとつにある休日に名前をつけていった。⁽⁸²⁾

ここでもいくつか取り上げているが、児童文学とは言え、ハロウィーンを描写をここまでしているものは他のものにはないだけに、まだハロウィーンが定着していない頃の日本にとっては、単に仮装と家巡り、trick or treat に終始しないもつとハロウィーンの持っている歴史性などを子どもにもわかるような内容である。

(5) 中子真治「■ハロウィン論■10月31日の幻想と怪奇のオバケ屋敷」(1979)

中子真治「■ハロウィン論■10月31日の幻想と怪奇のオバケ屋敷」(『キネマ旬報』第768号、キネマ旬報社、1979年9月上旬号)は1979年8月18日に日本で公開されたジョン・カーペンターズ監督『ハロウィン』の映画紹介である。

ぼくたちにとってハロウィンとは、やはりブラッドベリの小説『何か道をやってくる』で知った幻想的なカーニバルの夜であることぐらいで、10月31日がその以上に特

別な日であるようには思えない。それもそうだろう。本来ハロウィンとは荘厳なキリスト教徒のフェスティバルであり、一方では魔女や小人が彷徨し、悪霊の化身ブギーマンが出現するといわれている伝説の夜なのだから、日本人のぼくたちに実感できないのは当たり前である。ただし幸か不幸か、アメリカの少年たち—以前こどもであったすべてのおとなたち—が、親から夜ふかしを許され、少女のいたずらも大目にみてもらえる幻想と怪奇の夜、ハロウィンこそ、オバケ斬しがめつきり怖く聞こえてしまう特別な日なのだ。そしてこの特別な日をそのままタイトルにした映画『ハロウィン』は、そんなアメリカの夜に恐怖の拍車をかける事件を描くものではあるけれど、しかし例の習慣のないぼくたちにさえ、もちろん底知れぬ恐怖を体験させる。⁽⁸³⁾

海外でのハロウィーンの浸透でも映画『ハロウィン』はよく言われるところである。オカルト映画としてハロウィーン=恐怖がここで定着することになる。日本でもこの映画『ハロウィン』により、ハロウィーンが定着する大きな土台となった。恐怖を呼び起こすホラー映画、オカルト映画はウィリアム・フリードキン監督『エクソシスト』(1973)があり、日本での公開は1974年であった。しかし、内容もさることながら、タイトルの印象は非常に大きなインパクトがある。ハロウィーン自体が作品名になっていることから、映画への関心が高まれば、ハロウィーン自体への関心も高まるのも頷けるところだ。

Lisa Morton. *The Halloween Encyclopedia* (2003)では“Appdendix II Halloween in Literature and the Arts”の中でも取り上げている。

Halloween (1979)—John Carpenter and Debra Hill’s immsensely successful independent thriller began the slasher-movie cycle of the 1980s, and spawned a whole new classic holiday character: The Halloween maniac. The film opens in 1963, with a prologue in which a small boy, dressed in his Halloween clown costume, knifes his sister to death before being discovered by his parents. Sixteen years later the boy, Michael Myers, is now an adult mental patient who escapes the asylum where he is being held. His psychiatrist, Dr. Loomis, tries to convince authorities that he believes Michael is headed back to his hometown of Haddonfield, Illinois, but they don’t believed that Michale—who hasn’t spoken in 15 years—is dangerous. In Haddonfield, the town is gearing up for Halloween evening. Laurie Strode is a brainy, virginal teenager who will spend her night babysitting. As Laurie entertains her young charge with pumpkin-carving and horror movies, she is unaware that Michael Myers has already struck, murdering several of Laurie’s friends at the house across the street. The demented killer, wearing a cheap Halloween mask stolen from a local store, finally stalks Laurie throughtout a two-story house; although Laurie is resourceful and manages to injure Michael, he seems unsoppable, at least until Dr. Loomis appears and empties his gun into the killer. Although Loomis has

saved Laurie from Michael's rage, the killer's body—apparently shot dead by Dr. Loomis—is gone by the movie's ending, leaving Michael's demise uncertain. In addition to single-handedly creating an entire new sub-genre, that of the mad slasher horror film, Halloween also made a star of Jamie Lee Curtis, whose performancne as Laurie Strode helps to elevate the film above the horde of imitators that were to come after it. ⁽⁸⁴⁾

4 ハロウィーンの実施はいつから

これまで事典類や新聞の記事等、文献上の日本のハロウィーンについて見てきたが、文字情報としてのハロウィーンを紹介は明治時代の英和辞典にすでに登場していた。田村哲『外遊九年』(1908)では単なる言葉の定義に留まらず、ハロウィーンの起源、どのような習慣なのか、田村がアメリカ留学中に知ったハロウィーンの様子など 20 世紀初頭のアメリカのハロウィーンが紹介されていた。しかし、国語辞典のような一般的なものについてはその掲載は『大辞林』が早く、1988 年の初版から「ハロウィン」の見出し語が設けられている。それでも 1980 年代後半になってからだ。細かな状況は分かっていない。このように日本のハロウィーン研究は進んでいない。⁽⁸⁵⁾ そのため実際にイベントとしてハロウィーンが行われたの一体いつからなのかよくわかっていない。日本のハロウィーンを受容を正確に捉えることは難しい。⁽⁸⁶⁾

日本のハロウィーンを受容を現代の消費社会と結び付けて考察した関口英里『文化装置』を通してみる現代消費社会のメカニズム—日本における『アメリカ』をめぐる(博士論文、2001 年 3 月)では日本のハロウィーンの風習が戦後、横浜の本牧の米軍基地で行われたことが紹介されている。

本牧の歴史をつづった『本牧のあゆみ』によると、「戦後間もない頃はクリスマスともなると、進駐軍のジープに乗ってサンタクロースに扮した若い兵士達が…物珍しげに駆けつけた子供達に、チョコレートやチューインガム、ヌガーなどのクリスマスプレゼントを配ったりしてものです」(本牧のあゆみ研究会 1986: 93) とあることから、この地域では戦後間もない頃からアメリカの祝祭や風習との関わりがあったことがわかる。さらに本論文の主題であるハロウィンとの関連において特筆すべきは、この時期から本牧の接收地とその近隣でハロウィンの行事が行われていたという事実である。「間門あたりの子供たちは、10 月下旬の『ハローウィン』の風習を見習って、『カボチャ祭』と称して、それぞれに工夫した表情やお面で仮装を施し、接收地のハウスを訪問してお菓子をもらうという親しみがああり、それは接收地がなくなった今でも、近所に住む外国人の家を訪れるという形で続いています」(本牧のあゆみ研究会 1986: 93) という記述からも明らかなおおあり、本牧は敗戦直後からアメリカのみならず、ハロウィンとも密接なつながりを持つ土地なのである。⁽⁸⁷⁾

博士論文はその後、『現代日本の消費空間』（世界思想社、2004年10月）として出版されているが、その中でも日本のハロウィーンの導入として次のように紹介している。

クリスマスやバレンタインデーに続き、1970年代になって、10月31日のハロウィンが日本人に知られるようになる。日本最初のハロウィン行事は、戦後米軍ベースのあった横浜市本牧地区のアメリカ人とその周辺のコミュニティーのパレードだとする説がある（本牧のあゆみ研究会 1986年）。しかし日本におけるハロウィーンの始まりについて正確に把握するのはむずかしい。⁽⁸⁸⁾

（本牧のあゆみ研究会 1986年）とは本牧の会あゆみ研究会編『本牧のあゆみ』（新本牧地区開発計画局開発部新本牧開発室、1986年6月）のことである。実際に現本が所蔵されている横浜市立中央図書館で確認すると、「20. 接収—本牧のなかのアメリカ」としてその地域として以下のような記述がある。

この地域は Yokohama Beach DH-Area（横浜海浜住宅地区）と呼ばれ、1号地には427戸、2号地には483戸の木造2階建ての住宅がゆったりとした敷地に建てられました。

緑の芝生の上に立つ、白を基調とした淡い色に塗られた住宅は、急ごしらえがならもいわゆる「コロニアル風」と呼ばれるアメリカ式の建物で、狭い地域におしやれた私達のやけトタンにありあわせての木材でくつられたバラックから見れば、素晴らしく優雅な生活ぶりを想像させたのです。⁽⁸⁹⁾

まずこうした解説がある。そしてこの地域が特別であることが次のように解説されている。

この地域には特別の許可がない限り一般の日本人は立入りが禁止されていました。その後Ⅱ号地の主要道路のみ通行ができるようになりましたが、それでもそのほかの道路は路面を赤く塗られた「赤い道」と通称され、ちよつとでも迷い込むと、守衛やショアパトロールの車に追い出されるのでした。

しかしこんな金網のむこうの外国とも、子供たちは割合早く親しんだものです。

戦後間もないところには、12月25日のクリスマスともなると、進駐軍のジープに乗ってサンタクロースに扮した若い兵士たちが今の本牧4丁目公園あたりにやてってきました。そして物もずらしげに馳けつけた子供たちに、チョコレートやチューインガム、ヌガーなどのクリスマスプレゼントを配ったりしたものです。

間門あたりの子供たちは、11月下旬の「ハローウィン」の風習を見習って、「かぼちゃ祭」と称して、それぞれに工夫した衣装やお面で仮装を施し、接収地のハウスを訪問してお菓子をもらおうという楽しみがあり、それは接収地がなくなった今でも、近所に住む外国人の家を訪れるという形で続いています。

また学校レベルでは、本牧小学校あとを接収したアメリカンスクールと、間門小学校との間で、一時期学芸会の交歓会の催しも行われたこともありました。⁽⁹⁰⁾

本書では表記は便宜上漢数字も算用数字で表現しているが、関口の博士論文と引用されている現本との微妙な違いは確認しておきたい。

- ・関口博士論文

- 10月下旬の『ハローウィン』の風習を見習って、『カボチャ祭』と称して、

- ・『本牧のあゆみ』原本

- 11月下旬の「ハローウィン」の風習を見習って、「かぼちゃ祭」と称して、

ハロウィーンは10月31日であるため、関口博士論文のように10月下旬であるが、原本では「11月下旬」となっている点だ。これは単なる誤植なのか、それとも本来10月下旬に行うハロウィーンを遅れて11月下旬に実施したのか、他の資料からの確認ができたため、はっきりしない。少なくとも博士論文の引用では原本に「11月下旬」とあるが、当然「10月下旬」の誤植ではないかとの指摘は必要でないかと思われる。また、関口博士論文では「カボチャ祭」とカタカナ表記であるが、原本には「かぼちゃ祭」とある。

本牧の会あゆみ研究会編『本牧のあゆみ』（1986）で指摘されているハロウィーンを整理しておきたい。

- ・開催時期 11月下旬（10月下旬の誤りだと思われる）日本の習慣である冬至のかぼちゃが12月中旬ということからこのあたりとの混乱も特に感じられない。
- ・「ジャック・オ・ランタン」という言葉がないものの「かぼちゃ祭」という位置付けがある。
- ・仮装やお面を被るといった変装するイベントである。
- ・家々を巡ってお菓子をもらうソウリングが行われている。

ハロウィーンで行われるおもな行いがここではしっかりと実践されていることなる。普段は入ることができない米軍基地にこの時だけは入れるとすれば、それはまさに、異界の扉がこの日だけ開かれたのと同じことになろう。

関口などの研究では現在までのハロウィーンの日本受容の研究では、イベントのとしてのハロウィーンは本牧の米軍基地での実施が最初ということにある。さらに調査等が期待される場所であるが、可能性として以下のことが考えられる。

- ・本牧の歴史を扱ったもので、戦後まもなくの米軍基地との交流を扱った記事等のなかにはイベントとしてのハロウィーンがあるかどうか。
- ・米軍基地に限らず欧米からの来日外国人が家庭でハロウィーンパーティを開催している可能性。新聞や雑誌などで紹介され、活字として記録に残っているかどうか。
- ・米軍基地とのハロウィーンの関係から横田基地、横須賀基地、沖縄などでこうした記録があるかどうか。

- ・日本に早くから欧米人が定着した長崎などでの記録にハロウィーンがないかどうか。
- ・日本の離島で欧米人と交流のあったところで記録にハロウィーンがないかどうか。
- ・米軍や欧米人を除き、1983年のは原宿での仮装行列以前に日本人によるハロウィーンの記録がないかどうか。
- ・英語教育を推進する学校の中でハロウィーンを取り入れ、これを行った記録などがあるかどうか。

今後のひとつの可能性として指摘しておきたい。なお、筆者が注目しているのは小笠原諸島である。⁽⁹¹⁾

エピローグ

戦後の日本におけるハロウィーンを文献を中心にして見て来たが、英語教育や異文化理解を通して学校教育、特に初等中等教育においてハロウィーンの行事が紹介されていた傾向があった。海外での留学体験・視察報告より、特にアメリカのハロウィーンが紹介される機会が増えてきたことも大きな特徴だ。しかし、これらが日本のハロウィーンの普及の土台にはなったかどうかは怪しい。筆者自身も戦後教育を受け、小中学生時代を1960年代から1970年第前半に受けているが、学校でハロウィーンに関係するものを扱った記憶は全くない。少なくとも当時は「ハロウィーン」という言い方ではなく、「万聖節」「万聖節の前夜」と呼んでいたと記憶している。どうかすると、「前夜」もなく、単なる「万聖節」といったようなあまり深く理解しないまま世の中でこの言葉が使われていたようだ。また、実際の行事のとしてのハロウィーンについては特に在日米軍や離島における在住アメリカ人の影響が大きいのではないかという推測ができる。しかし、資料などもまだ十分ではない。

文学作品でもハロウィーンを扱ったものがあるが、英語教育と同様にこれらが日本のハロウィーンの土台作りになったかも定かではない。今回はあまり取り上げなかったがこうした土台とは別に映画『ハロウィン』（1978年／日本公開1979年）、その後の『E.T.』（日米公開1982年）などにより一般的に知られるようになったというエンターテインメントの影響を無視することできない。日本の場合には欧米とは文化背景が大きくことなることから、文学作品、活字により土台作りが進んだかどうかさえ怪しいところだ。しかし、教育現場では異文化理解の一環として、いわゆる教材のひとつとして取り上げるところであったことも無視できないところだ。文献によるハロウィーンを受容は建築的な考えから言えば、基礎工事の段階であり、ここからようやく土台が創られる段階であったと言わざるを得ないだ。

注

- (1) 紀平健一「戦後英語教育史 私論—ひとつの総括—」（『日本英語教育史研究』第15

- 号、日本英語教育史学会、2000年)、p.98.
- 小島信夫『アメリカン・スクール』(新潮社、2008年1月)は容易に入手できる。
- (2) 公益財団法人日本英語検定協会「事業沿革」
<https://www.eiken.or.jp/association/history/> (2020年10月4日アクセス)
- (3) 中澤健「Halloween Party ハロウィン・パーティー」(『時事英語研究』(第4巻第11号、1949年11月)、p.26.
- (4) 坂西志保「ハロウィーンのまつり」(『アメリカの生活』社会科文庫、三省堂出版、1950年1月)、pp.205-206.
- (5) Ibid, p.206.
- (6) Ditto.
- (7) Ditto.
- (8) Ditto.
- (9) W. Russell, Robert. “A Quiet Halloween—American Life through Conversation—” (『英語研究』(第44巻第11号、研究社出版、1955年11月)、p.41.
- (10) Ibid., p.43.
- (11) Ditto.
- (12) Clark, W.L. “Lesson Fourteen HALLOWEEN” は『SPOKEN AMERICAN ENGLISH (Advanced Course)』(研究社出版、1957年9月)、p.119.
- (13) Ibid., pp.119-120.
- (14) 「〈10月の行事〉ハロウィン」(1957) (『中学英語時代』第1巻第63号、日本英語教育協会、1957年10月)、p.22.
- (15) Ibid., p.23.
- (16) Ditto.
- (17) 山沢かよ子「10月の行事—ハロウィン」(『中学1年英語コース』(第2巻第6号、学習研究社、1958年10月)、p.6.
- (18) Ibid., p.7.
- (19) Ditto.
- (20) Ditto.
- (21) 庄野潤三「万聖節前夜」(『ガンビア滞在記』中央公論社、1959年3月)、p.81.
- (22) Ibid., pp.82-83.
- (23) 加藤秀俊『アメリカの小さな町から』(朝日新聞社、1965年4月)、pp.216-218.
- (24) Ibid., p.219.
- (25) 桂ユキ子「ハロウィン」(『小二教育技術』第20巻第9号、小学館、1967年11月)、p.11.
- (26) Ibid., p.10.
- (27) Ibid., p.11.
- (28) 小山田義文「Halloween と Walpurgis Night」(『高校クラスルーム』(11月号、旺文社、1970年11月)、p.28.

- (29) Ibid., p.28.
- (30) Ditto.
- (31) Ibid., p.29.
- (32) 水池日出夫「ハロウィンパーティー」(『海外の教育』(第85号[第12巻第2号]、全国海外教育事情研究会、1986年3月)、pp.10.
- (33) 松村武雄『儀礼及び神話の研究』(培風館、1948年4月)、p.396.
- (34) Ibid., p.398.
- (35) 西角井正慶編『年中行事辞典』(東京堂出版、1957年5月)、p.668.
- (36) 高橋康也「Halloween、Hallowe'en [hælouí:n]」(成田成寿編『英語歳時記／秋』研究社出版、1968年12月)、p.89.
- (37) 櫻庭信之「ハロウィーンの夜祭り (Hallowe'en Bonfires)」(安東伸介・小池滋・出口保夫・船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』)、pp.284-285.
- (38) 加藤恭子「アメリカの年中行事」(佐伯彰一他編『アメリカハンドブック』三省堂、1986年10月)、pp.671-672.
- (39) 粕谷千由紀「ハロウィーン Halloween」(亀井俊介編『アメリカ文化事典』研究社出版、1999年9月)、p.358.
- (40) 岡田泰男「ハローウィーン | Halloween: Hallowe'en」(斉藤眞他監修『【新訂増補】アメリカを知る事典』平凡社、2000年1月新訂増補版)、p.390.
- (41) 坂本ひとみ「ハロウィーン、万聖節の前夜祭 (Hallowe'en)」(橋口稔編『イギリス文化事典』大修館書店、2003年6月)、pp.263-264.
- (42) 加藤迪男編、『記念日・祝日の事典』(東京堂出版、2006年4月)、p.156.
- (43) 新谷尚紀監修『ポプラディア情報館年中行事』(ポプラ社、2009年3月)、p.137.
- (44) 小林英美「人気のないハロウィーン」(出口保夫・小林章夫・齊藤貴子編『21世紀イギリス文化を知る事典』東京書籍、2009年4月)、pp.684-485.
- (45) 日本英語文化学会編『北米文化事典』(日本英語文化学会、2012年3月)、p.127.
- (46) 小森真樹「祝日・祭日」(アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善、2018年1月)、p.503.
- (47) 飯城勇三「解説 クイーンの最高傑作」(エラリー・クイーン／越前敏弥訳『[新訳版] 災厄の町』早川書房、2016年4月)、p.510.
- (48) Queen, Ellery. *Queen's Ransom: The Roman Hat Mystery Calamity Town Cat of Many Tails* (Myster Guild, 1957), pp.285-286.
- (49) エラリー・クイーン／越前敏弥訳『[新訳版] 災厄の町』、p.83.
- (50) レイ・ブラッドベリー／大久保康雄『何かが道をやってくる』(東京創元社、1985年4月)、中表紙(頁表記なし)
- (51) Bradbury, Ray. *Something Wicked This Way Comes* (Collancz, 2015), p.1.
- (52) レイ・ブラッドベリー／大久保康雄『何かが道をやってくる』、pp.9-10.
- (53) Bradbury, Ray. *Something Wicked This Way Comes*, p.6.
- (54) レイ・ブラッドベリー／大久保康雄『何かが道をやってくる』、p.14.

- (55) 「【ネタバレ】『何か道をやってくる』レイ・ブラッドベリ」(2014年09月30日)
https://puripuriouch.at.webry.info/201409/article_13.html
 (2020年9月11日アクセス)
- (56) Bradbury, Ray. *Something Wicked This Way Comes*, pp.70-71.
- (57) レイ・ブラッドベリ／大久保康雄『何か道をやってくる』、pp.97-98.
- (58) Bradbury, Ray. *Something Wicked This Way Comes*, pp.179-180.
- (59) レイ・ブラッドベリ／大久保康雄『何か道をやってくる』、pp.231-232.
- (60) 「【ネタバレ】『何か道をやってくる』レイ・ブラッドベリ」(2014年09月30日)
https://puripuriouch.at.webry.info/201409/article_13.html
 (2020年9月11日アクセス)
- (61) Morton, Lisa. *The Halloween Encyclopedia*, pp.28-29.
- (62) Ibid., p.29.
- (63) Ibid., p.206.
- (64) アガサ・クリスティー／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』(早川書房、2003年11月)の裏表紙より。
- (65) Christie, Agatha. *Hallowe'en Party* (HarperCollins, 2015), p.2.
- (66) アガサ・クリスティー／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』、pp.8-9.
- (67) Christie, Agatha. *Hallowe'en Party*, pp.2-3.
- (68) アガサ・クリスティー／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』、pp.9-10.
- (69) Christie, Agatha. *Hallowe'en Party*, pp.3-4.
- (70) アガサ・クリスティー／中村能三訳『ハロウィーン・パーティ』、p.11.
- (71) Morton, Lisa. *The Halloween Encyclopedia*, p.206.
- (72) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ベスト版 ハロウィーンがやって来た』(晶文社、1997年10月)、p.193.
- (73) Ibid., pp.194-195.
- (74) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやって来た』(晶文社、1975年5月)、p.197／レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ベスト版 ハロウィーンがやって来た』(晶文社、1997年10月)、p.196。／この部分の解説は1975年版と1997年版と同一文である。
- (75) Bradbury, Ray. *The Halloween* (Bantam Books, 1981), 中扉2頁分(頁表記なし)
- (76) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやって来た』(晶文社、1975年5月)、pp.6-7相当(頁表記なし)
- (77) Bradbury, Ray. *The Halloween*, pp.27-27.
- (78) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやって来た』、pp.35-36.
- (79) Bradbury, Ray. *The Halloween*, p.84.
- (80) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやって来た』、p.95.
- (81) Bradbury, Ray. *The Halloween*, p.171.
- (82) レイ・ブラッドベリ／伊藤典夫訳『ハロウィーンがやって来た』、p.184.

- (83) 中子真治「■ハロウィン論■10月31日の幻想と怪奇のオバケ屋敷」(『キネマ旬報』第768号、キネマ旬報社、1979年9月上旬号)、p.133-134.
- (84) Morton, Lisa. *The Halloween Encyclopedia*, pp.206-207.
- (85) 関口英里「日米のテーマパークにおけるハロウィン・イベントの展開—消費文化の生成の再構築をめぐる—」、『比較文化研究』、第80号、日本比較文化学会、2008年3月)、p.30.
- (86) 大久保衣純「日本のハロウィーン受容—カワサキハロハロウィーン 2014 の実態調査から」(『國學院雑誌』、第116巻第11号、國學院大学、2015年11月)、p.23.
- (87) 関口英里『文化装置』を通して見る現代消費社会のメカニズム—日本における『アメリカ』をめぐる—、大阪大学大学院言語文化研究科、博士論文、2001年3月)、p.70.
- (88) 関口英里『現代日本の消費空間—文化の仕掛けを読み解く』(世界思想社、2004年10月)、p.23.
- (89) 本牧本牧の会あゆみ研究会編『本牧のあゆみ』(新本牧地区開発計画局開発部新本牧開発室、1986年6月)、p.92.
- (90) Ibid., pp.92-93.
- (91) ジャパンハロウィンサミット実行委員会主催・日本ハッピーハロウィン協会・六甲アイランド地域振興会共催「第1回 ジャパン ハロウィンサミット」(ZOOM ウェビナーによるオンライン開催、2020年9月22日)では「東京都小笠原村 小笠原諸島に、人が最初に定住したのは江戸時代後期の1830年、欧米人と太平洋諸島民でした。その後、江戸幕府や明治政府の調査、開拓により1876(明治9)年には国際的に日本領土として認められます。この頃から既にハロウィン文化が伝わり、今では10月31日になると各家庭で自然発生的に、子供達のためのハロウィン、そして大人も一緒に楽しむハロウィンが定着。まさに日本ハロウィンの聖地といえる存在です。」
- (同大会チラシより)
- また、ダニエル・ロング、稲葉慎編『小笠原ハンドブック 歴史、文化、海の生物、陸の生物』(南方新社、2004年9月)には「小笠原の年間行事」(p.59)、山口遼子『小笠原クロニクル 国境の揺れた島』(中央公論新社、2005年7月)には、p.225, p.245にハロウィンへの言及がそれぞれあるが、それが何時から行われたものなのかについて、はっきりとした明記はない。

キーワード：ハロウィーン、年中行事、イギリス文化、アメリカ文化、英語教育